WASON
HQ
1104
J74

Mar. 1899
no. 484

明治三十二年三月二十五日

女學雜誌

第四百八十四號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百八十四號目次

◎社說

理勢論

「海舟餘波」公版の微意

◎女學

近松女氣質（武村）

（其二）巣林子の時代と境遇

（其三）鈴㯖三重帷子のおさゐ

田舍に於るお嫁樣（紫琴女史）

歌　三首（池袋清風）

◎評論

明治三遷論（布川靜淵）

鬼面百相（青柳有美）

◎雜錄

單稅太郎ガルスト氏（青柳猛）

（附單稅論の大意）

◎隨感

◎片々

◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即はち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主さして、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんさするを旨さす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみさ指定して所望せらるるものあらば其の需めに應すべし

㊅女學雜誌定價表㊅

前金		
壹冊定價	拾錢	（內國無郵稅）
半年分定價	壹圓拾錢	
一年分定價	貳圓	

◎代金は總じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送すゞとも可有之事◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事

廣告料			
一行（廿七字詰）	一回	前金拾錢	
同	三回以上	一割引	
同	六回以上	二割引	

送金　送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし○郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割增にて計算せられたし

明治三十二年三月九日印刷
明治三十二年三月十日發行
發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場（電話本局十九番）

女學雜誌發賣元　東京市神田區表神保町　東京堂書店

◉婦人科
◉小兒科專門至誠醫院治療之趣旨

本邦婦女の特性として温柔靜肅を旨とし閨門深く垂れ籠めて猥りに人に接はらぬを良家の庭訓となすが故に男子とは席を同ふし語を交すをさへ道に缺くるものとし畏るべき病症殊に子宮疾患の如きは醫に就くを羞ぢ厭ふが爲めに唯縮かに心を痛め身を苦しめ終には人生の快樂を殺ぎ子孫の繁榮を遮ぎり天壽を天折さるもの尠なからず豈嘆かはしき至ならずや　本院長も又是國風の間に人となり深く此弊を憂へ之を救ふの道もがなと慨然婦女の分として妄りに身を挺んで齊榮にして深邃なる醫學に志し研鑽多年その業を卒へ爾來又た數年東西の諸大家に就きて特に婦人科を研究して刀圭に從事する所以のものは己れ女性に生れたるの天職たるを信じて昵み近づき易く打ち解け語らひ易き同胞姉妹の疾患に對しては能く貞淑の美德を傷けず愼重懇切に治療し得るは竊かに諸大家に讓らざるの特技あるを期す又小兒科に在りては第二の慈母として狎れ懷き易きが故に幼兒をして畏ぢ恨れ失聲啼泣せしむるが如きことなく安靜に診療を施し得るを以て誤診姑息等の弊なしとす是れ　本院長が起ちて世の同胞に告ぐる所以なり

院長女醫鷲山彌生診察本院午前分院午後
本院麴町區飯田町四丁目九番地
分院京橋區宗十郎町二番地
至誠醫院

女學雜誌

第四百八拾四號

明治三十二年三月二十五日發兌

社説

理勢論

○冷水を温ためて湯となすには、若干の温度、潛熱となり、而して後ち沸騰す。」沸騰したる湯の冷却するや、徐々として時あり。暫らくは、元の如し。漸やくにして、次第に冷却すれども、其の熱尚ほ久しきに續く。」潛熱を貯ふるの間は、所謂ゆる潛勢を養なふ也。冷却の間だ依然として熱あるは、所謂ゆる餘波を舉ぐる也。」人や、此の傾向を審びらかにして、其の勢の趣むく所を察せざる可らず。否らざれば、見解一々に誤まり、着手毎々機宜を失せんか。

○明治維新の事、南洲、海舟、甲東、松菊等の傑士ありて、久しく潛勢を養ふ。一旦、煥發して、帝政復古の偉勳あり。諸傑悉な逝きて、餘子只だ汎々たり。大率ね其の波流に浮べるあるのみ。

○此等の傑士、政事によりて一大改革を遂げたり。其の赤誠爛熳、臺閣の上に滿開し、萬民手を額ざして贊歎せり。乃わち光榮と、美と、道德と、大抵、政閣に集まりたり。人の政事を譽れとして、臺閣に上らんとを理想とせし、宜ならずや。

○傑士一と度び去りてより、餘波に浮べるもの、潮と共に進み、大座に相續して、格外の權勢を握る。素と其の分に非るが故に、運爲自由なるを得ず。過誤之より生じ、人心漸やく倦む。臺閣の座は、幾多の醜聞を釀せり。今や、必らずしも譽れの地にあらずと雖ども、尚ほ餘波のあるあり。固より尚ほ之に浮ばんとを欲するものなくんばあらず。

○別に、新らしき勢力の座次第に建設せられ、以て他日の地盤たらんとするもの、素より之ありと雖ども、今や只だ其の礎を置え、其の臺を据くに過ぎず。潛勢を積むの間、未だ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

普ねく人の目を惹くと能はざるは、當然ならん。

○只だ機一轉し、勢趣既に流を回へせるの事ありと雖ども、未だ之を知らざるもの多く、通常尚ほ依然として餘波に眠り、閑暇の節を覺らざるに似たり。果して可なる乎。

○夫れ、理は勢を待ちて理たり、道は人を待ちて道たり。未だ勢を知らずして、何の常理かあらん。未だ人に得ずして、何の常道かあらん。慨れむ可し、形跡を尋ねて常の道とし、空理を論じて常の勢となすとや。

○曰く、政治。曰く、内閣。曰く、政黨。曰く、根本的改革と。抑そも、醉ふとの何んぞ久しきぞや。民、無心にして、既に早く倦み、勢、無着にして、夙に進歩せり。漸やく謳歌して、十年の志望成れりと言ふの口や、事既に陳腐に屬するを知らずや。語を新たにして、空想を生かすの徒よ、試ろみに、法性寺入道前關白太政大臣の内閣と、其の政黨とを思へ。彼も亦た當年第一の政治家たり、所謂ゆる根本的改革なるものを施こせし誹儕にはあらずや。

○松隈内閣の時、人才登用の語あり。之よりして人才たらんとするもの増殖せり。當時の改革家、何等の善政あるとなかりき、之よりして改革の名大に衰ろへたり。今にして、政黨内閣を夢み、其餘澤に關からんとするもの尚多きか。

○理を講じて勢を知らざるは、迂儒なり。勢を見て理を思はざるは、俗人なり。理と勢とを二つとなすものは、未だ至らず。理勢不二を識るに及んで、稍や可ならん。

○凡そ今人の病は、卓然たる見識なきにあり。稍や多少の識見ある者も、之が爲に死せんとするの感激なし。此を以て、事功に中心を存せず、只だ浮漂して偶然に歸着す。又此を以て、人心倦む。凡そ决死の覺悟なき策略は、たとひ成ると雖も尚ほ人心を萎靡せしむ。人心萎靡して、能く何事をか成さん。

○惜しむべし、我邦古來大抵機先を制せられ、常に海外先進の國に摸倣せずと云ふとなし。而して、其の摸倣するの間だ之を文明國とし、之に厭くに至つて之を舊弊とす。指を屈して三韓、天竺、支那、西洋と列舉し來れ。而して、西洋の各國に就いて、其の或は崇め或は厭く所の變遷を看よ。既に、蘭、米、英、佛、獨の五國に對して、走馬燈の如く變轉せり。將來は果た何れの國ぞ。夫れ斯の如く一概に摸倣せんとするものあり、乃はち亦た一概に反動せんとするものあり。摸倣は

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

元より機先を制せられたり、反動も亦た機後の事なり。吁、誰か能く卓然たる。

○家は其小なるを憂ひとせず、賢夫貞婦なきを憂ふ。國亦た其の小なるを憂ひんや、只だ人物なきを憂ふ。近時往々島國根性の語を用いて自から慨せんとするものあり。乃はち是れ島國根性にあらずや。大厦に英児を生まずして、茅屋に鳳雛あり。何んぞ必らずしも國土の小なるを憂ひん。

○若し其の天幸を算へなば、日本帝國の如きは、格外の慶福を得たるものなり。數千年間、特種の取扱を受たり。一國一家の如く和睦せり。四面、周らすに海を以てす、狹しと云ふ可らず。内に高山大川あり、區劃少なしと云ふ可らず。若し能く仔細に分別せば、亦何をか痛まんや。

○但だ期す、如今最早や異色の人物なくんばある可らず。大勢既に轉じ、醉夢尚ほ覺めざる歟。一つらなる崇拜信仰大いに破れて、民、回顧反省し、以て自から立んとするの機兆熟したり。將に新時代の新人物の起らんとする季節にあらずや。此時此際能く理勢を知るものあらば、國運振張すべし。其人なくんば、國勢遂に萎靡として衰廢せんのみ。

「海舟餘波」公版の微意

勝海舟先生在世の日、編者屢ば其門に趨り、悉とく清話を筆記せり。素と、珍藏愛讀して自から慰さめたるものに過ぎざりしに、今や乃わち之を公版に附す。是れ少しく微意の存するあれば也。

昔し、魏の文公、扁鵲に問へらく、卿が兄弟三人あるに、其中誰か尤とも能く醫を爲すやと。扁鵲答へて曰く、長兄は、病を未發に防ぎ、患を未然に治む、其の敎に從ふもの遂に病患あるなし、此を以て長兄の功を知る者稀なり、名の聞えざる所以なり。仲兄の施こす所は、技術非凡、尋常の手段にあらず、其の根を醫やし、其元を養ふ、常人多くは之を酷なりとして其の痛激に堪へず、此を以て仲兄の仁を知る者稀なり、名の揚らざる所以なり。余の如きは、其末に醫し、其弊に救ふ、偶たま快心の治術ありと雖ども、抑そも末技に過ぎざるのみ、而も世人皆な余を賛して天下第一とし、反つて吾が二兄の功德を知らずと。

嗚呼、國家の病を醫やすもの亦た斯の如きか。大道素と義な

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

く、大功必らず名なし。近世に於て能く此の機微に達し、而も能く巨勳を擧たるもの、吾人は之を海舟先生に於て得たり。先生は能く無名大功の秘密に練熟せるものなりき。

看よ、今にして此般の消息に通ずるもの甚はだ少なし。たとひ通ずるとも其實行あるものに至ては、殆んど稀なり。功を慕ふもの、功に醉ふもの、功を貪ぼるもの、功に爭ふもの、紛々としてあり。功なきの功即はち大功たる所以を知り、功は其功を沒するに至つて始めて生命ある所以を覺るもの、何所にありや。千東萬畔の故人、優に其の教訓を垂れたり。吾人今にして之を公けにするは、或は夫れ世道人心の一助たるを得んか。

嗚呼、藩閥の根底何所にありや、功臣其の功に誇れば也。藩閥を非とするの聲、何所より起るか、功臣の功を嫉めば也。政黨の分裂と、政海の騷擾と、何を以て甚しき、互ひに功を爭そへば也。玆に人あり、功を沒するを知ることあらば、天下乃はち安けん。

人或は曰はん、如斯きは道學先生の言、實際に用なしと。其の道學たると否とは、亦た問ふを要せず。獨り之を以て實際に遠しとするものに至つては、其人の寧しろ實際を知らざるを自白す。功あり亦名あるは、事業の餘弊なり、其の生命にあらず。凡そ生命あるの事業にして當時に名あるもの無き所以の事實を見よ。人苟くも、功名を求むとせば止む、功名は末なり、只だ生命を求めんとするを主旨とするに非ずや。然らば則わち何んぞ無名無功の本領に安住せんとするを勉めざるや。

四

海舟先生の如きは、能く其の知を得て、亦た其行を盡せり。與とに近代の偉訓なりと知るが故に、先生一去して氷川清風の絶たる今日、玆に少しく其の餘韻を鳴らす亦た可ならずや。現に近く此の如き偉人ありたるを覺るは、明治の譽れにして、正者の慰さめなり。只だ海舟先生を見て、其の維新の功臣となし、只管らに其の偉勳を賛する如きは、寧ろ淺からずや。吾人は反つて其の無名を大なりとせんと欲する也。

無功亦無名　不求貴與榮　雖危今半了
飄然身世輕
勝　義邦

誠なき名こそ知られて折々は
とはるるさへも恥かしの身や
勝　安房

近松女氣質

櫻井鷗村

（其二）巣林子の時代と境遇

序論に於て、予は既に、近松世話淨瑠璃中の女性を類別したれば、將に、本論に移りて、聊か、巣林子の女主人公中の主なるものを捉へて、彼に女性の情感を觀破するの明ありしを認め、以て、古へも今も變りなき、世の女情を闡明せんとす。而して之に先だち、爰に少らく、巣林子在世の時代と、彼が處せし境遇とを察するの要あるを見る。

門左の生れしは、元和偃武以後殆ど四十年なる承應元年にして、其處女作として見るべき賴朝七騎落は、其三十四歳の日に成れり。而して、彼が盛んに、筆を世話淨瑠璃に着けたるは、長町女腹切を成したる四十八歳以後に在り。即ち知る、巣林子の時代は、徳川氏泰平の曙光、既に三竿に冲して、ややうやく百年なる日にありしことを。夫れ泰平の人心をして輭弱ならしむるの速かなるは、近く例を、維新の洶湧去りて、僅に三十年なる今日に鑑みて、明々地に之を知るべし。風枝を鳴らさゞること久しうして、樹幹蟲害に朽ち、四海波を擧げざること久しうして、滄溟塵芥に濁る。太平打續くこと一百年、人心の頽廢、安んぞ甚しからざるを得んや。巣林子の四十一歳なる時、既に五十二歳の世の秋風に散りにし、井原西鶴は、一代の事業を好色談に留めつゝ、當年の社會の混濁淫佚なるを描寫して、時人また之を歡迎したるに非ずや。西鶴が貞享三年に世に公にせし、一代女に『此四十年跡までは、女子十八九までも竹馬に乘りて門に遊び』しに、當時は十二三歳の少女、既に才はだけて、油斷ならざりし由を記せり。巣林子は、實に之より以後の社會の滔々として、いよ／＼腐濁するを觀じたるものなり。

金平本の優情に欠けたるに飽きたる世は、近松の天才を呼び起して、艶事、愁歎を見所としたる時代淨瑠璃を作らしめたるが、隴を得て蜀を望むの人情の然らしむる所、出世景淸の阿古屋に泣きたるものが、後十七年にして、曾根崎心中の艶

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

柔濃情なるを得て、時世は、遂に近松に向つて、續々二十餘種の世話物を要求したり。近松を作者としたる竹本座に對して、紀の海音等を作者としたる豐竹座の、世話物を興行し初めたるも同時代なりき。知るべし、世の益々太平にしていよ〳〵淫靡に奔りし事を。

而も西鶴、近松、海音等、共に、大坂に在りて、京坂人の嗜好に投じて、其筆を取れり。京坂地方たるや、民俗由來柔弱なるを以て、其頽廢に流下するとも、亦關東粗放の民俗よりも速かなり。然るに西鶴に前後して、其角、不角等の俳士をして、江戸に在りて、なほ好色物語を臨作せしめたるに於て、當時、京坂の民俗淫靡の度、推知すべきに非ずや。

今日京坂に遊んで、地の俗を問ふもの、必ずや、一驚すべきは、土地の者の、藝娼妓の身上りものを『出とつた者』と稱して、之を輕蔑するよりは、寧ろ、粋にして、氣前よきを賞賛することとなるべし。祇園の新地、京都に跋扈し、大坂の狹き、五花街を有して、不夜城の觀をなす。此如き地、何ぞ風俗の淸きあるを得んや。而して、今を推す、なほ故きを溫ぬべし。元祿享保時代の京坂の民俗以て知るべし。花街に心中情死流行して、之が爲に人心、一種の悲的快感を惹起して、由つて、作者と芝居とに求むるに心中物を以てしたるものなるべく、且つ、此種の淨瑠璃や彼の『ウエルテルの歎』が、獨逸の失戀青年に自殺を促す程の効力なしとするも、なほ「遂げぬ戀は、情死を以て終れ」との教訓を加へ、「あの世で夫婦」との詩的理想を抱かしむるに預りて、力ありしや、また疑を容るゝ能はず。

世話物とは即ち、男女の戀の破れたるを繕ひて情死に終るものか、破れ砕けて終るものかの悲劇なり。近松の曾根崎心中、海音の心中泪の玉の井以後、世人は此悲劇を渇望したり。彼萬治二年に在りし實事と稱するお夏淸十郎の物語の如きは、風聞早くも九重の奥に達して、時の帝後西院は、

淸十郎聞け夏が來て鳴く郭公

とあり玉ひしに、上皇後水尾

笠がよう似たみじか夜の月

と唱和し玉ひしさへあれば、其、人口に膾炙傳せしものたりしや明かなり。然れば、此悲痛の逸話は早く何人かの戯作又は情歌に入りしなるべきも、三四十年間は、なほたゞ朧氣

六

なる口碑に過ぎざりしなるべきを、西鶴は、貞享三年に五人女に於て、其妙筆を以て之を永世に傳へたり。然るに、時人の世話悲劇に熱するや、此有名なる悲話を口碑または文字にのみ見るに飽きて、近松が、哀れなる彼二人の死後四十五年に及んで、笠物狂ひを出し、更に五十年忌に當りて、歌念佛を作りて、共に劇に演ぜしめたるによりて、初めて其悲的快感を滿足せしなるべし。

巣林子の時代は、畧ぼ如斯く、而して、彼は時代の需要に應じて、其筆を採りたるものなり。且つ又彼の境遇を見れば、其戲曲の性質を概知するを得べし。

近松門左衞門、即ち杉森信盛の產地は、長州萩或は越前なりと傳へ、其小少學を受けたる近松寺は、肥前唐津に在りといひ、又近江なりともいふ。幼時の境遇は即ち不明なり。長じて京都に出で、某堂上方に仕へて、六位の爵を賜はり、元祿に及んで、浪人して、貞享三年竹本義太夫の爲に、出世景淸を作りたる後、居を大坂に移して、其生を終へたり。彼既に四十年間を大坂に送りたりとすれば、其一生は殆ど京坂の間に過ぎて、其生地の如何に關せず、彼は、即ち上方人なりしといふも不可なし。江戸の空氣を呼吸したることありとするも、甚だ稀なるべく、遊歷は其好む處なりし如きにも拘らず、東は尾州、西は西國を境となして、其足多くは京畿附近を出でざりしもの〻如し。今彼が、達磨の本地をものせし貞享四年の夏即ち三十五歳より、冥途飛脚を作りし正德元年の夏即ち五十九歳に至るまで、遍歷せし地方を類列すれば左の如し

尾張	一	美濃	一	伊勢	五
大津	一	京都	五	奈良	五
堺	八	伏見	二	紀州	一
中國路	三	讃州	一	西國筋	一

此他なほ遺漏あるを免れずと雖も、之に由りて見れば、其足跡は、殆ど京坂風俗の化布區域を離れず。されば、彼の慧眼を以てして、到處に、人情を洞破せしとするも、必ずや、吾が朝夕親しみ馴れし地の俗に異なると多きを視る能はざりしならん。

爲に筆を執りし目的は京坂人なり、彼自らも亦殆ど純乎たる上方人なり。人情も亦た〻京坂人に就て視たり。これ彼が、

情性の幾微を描出すべき世話物に於て、舞臺及び人物を京坂附近に限りたる所以なるべし。

其人物たるや、巣林子の世話物戯曲の男性の京坂人なるが如く、其女性も亦然り。而して、素人にしてはおさゐ、おさん、お種、お夏の如き者を點出し、黒人と雖も依然たる京坂人にして、性柔和に、其意氣地張りの手加減も、昔の江戸藝者若くは女郎の如くに俠なるものに非ざれば、之を立て通すの意志弱く、暫くにして、眞の情愛となり、初めは商賣人たるも、後は處女の如きものなり。

* * * * *

予は既に少しく近松門左の時代と其境遇とを察したりと信ず。由りて、爰に初めて、論の本旨に入りて、先づ、意外の夫婦の語らひをなして、哀愛苦樂倏忽として轉換する夢境に彷徨ふの女性、即ち、鑓權三重帷子のおさゐ、堀川波の鼓のお種及戀八卦柱暦のおさんを觀んとす。近松世話劇の女性多しと雖も、此三者の如きは、性格矛盾の點ありて、統一を欠くに似て、而も此奇異なる處に、よく一種の女情を敘し來り、之を描くと、蓋し巣林子の最も苦心慘憺の勞を積みしものなるべし。されば又、此等を捉へて、解剖説明を試むるとは、甚だ容易の業に非ず。

（其一）　二十年の馴染も　戀には迷ふ

鑓權三重帷子のおさゐ

おさゐは如何なる女性か。其系統より見れば、父は雲州某藩の進物番岩木忠太兵衛とて『六十八でも生得堅氣』『一途に堅き國武士』とて、律氣堅氣に凝りて、娘の不義を憤りて、涙を呑んで、其婿に之を打たしむる武士の心懐凛乎たるものあるが如く、また相應の學問もありたるに似たり。されど、孫娘の事をば『娘の子は十三四から端近く出さぬがよい』とか、婿市の進の江戸留守に、其妻たる娘おさゐが、淋しさを推して、孫の虎二郎に戯れて、『こりや市の進江戸より歸つたといふて、母が傍へちやつと行け』とか、また淺香家の留主の心付に、押しの足らぬ工合など、作者は、この堅氣老武士に滑脱洒落の性あるを許したるものか、果た又、筆餘の謔

語か。それとも此老人も、昔には、なか〱の當世男なりしものか。併し近松の癖として、老武士は、律氣堅氣と書きくるめるなれは、性格の判然なるものありて、おさゐに何程の感化を與へたるかは、作者も問はざりしなるべし。母も尋常の女、弟甚平も、たゞ武士として、描きたるもの、姉の驅落を尋ね廻りて、やうやく伏見京橋畔に見付けて、不倶戴天の仇に百年目と喜ぶが如く、流石血を分けた親身を悲しみ惜む情、ちッとも見えぬは、作者の捨て置きし所なるべし。夫市の進は御膳番で茶人、これも戯曲の表にては、たゞ堅氣の武士とより見えず。されは、父母、兄弟、夫の性格の、おさゐの心上に、何等の關係なしと見て可なるべし。

一家堅氣に育てし家に、何故おさゐの如き、『物好もよく、氣も伊達に、三人の子の親でも、花車骨細な生れ付、風忍ばしく床しくて卅七とは見えざりし』いはゞ風俗花車に、寧ろ浮氣なる娘ありしや、堅氣一方にして、寛濶なるに欠けたる家庭よりは、往々放蕩なる息子、浮氣なる娘を出すものなれば、おさゐもさる類の者か。されど其穿鑿沙汰は暫く置き、彼が如き女子は、今も尠からねば、昔にも多かりしなるべし。

實にかゝる類の者は、あるものにて、若し境遇に誘惑なく、己も心引きしめて、身をたしなむるものならは、幸にして、一生の節を全うするも、之に反して、謹み足らず、情熱に狂して境遇災ひを竊らせば、よしや不義の奴隷とならざるも、浮名世評は免れざるべし。

概するに女子の好む男子とは、男らしくて、而もやさしく、堅氣にても、而も風雅なるものにして、おさゐの如き多情なる女子は殊に然り。彼が如きは、其多情を傾盡し得べき男子に遇せずんは、滿足を得がたし。夫、市の進の性格は定かならねども、まづ堅氣にて茶人なれども、風流といふ點には乏しきもの、而も四十九にて、頭やうやく禿げては、年增盛りにて、三人の子、惣領は十三、追付け嫁入さすべき娘は持てど、朝夕、鏡臺の抽斗に、眉刷毛在ることを忘れず、いつも初戀の氣にてありたき者には、二十年來の夫とし事ふれども、必ずや胸中何となく、樂しき緣とは思ひ難かりしなるべし。

『器量はお國一番武藝ようて、茶の道も弟子衆に續ぐは無い。そして氣立と云ふ物が、万人にも憎まれぬ、愛らしい堅氣、男のキッス丼〱』と見立てたる笹野權三の如きは、おさゐ

が理想的の男なり。母は己の好む處の男を以て、娘に配合せんとす。然るに、父の如き男とはいはずして、權三をと切望するは、念々の隱微裡中に、市の進は理想に叶ひたる男ならじと思ひて、『ほんに市之進と云ふ男を持たねば、人手に渡す權三樣ぢや無いわいの』と、娘に讒言するは、いつはりなき眞情を語れるならん。二十年の昔に、權三の男振を見たらんには、父母を棄てゝも、心中してなりとも、添ひ遂ぐるなりしならん。おさゐ天性多情なるに、十七の曉に、父母の好みによりて、戀もせぬ堅苦男に片付けられたるは、一生の不幸の禍端を開きたるぞ哀れなる。

おさゐ、多情にして浮氣、かゝるものは多くは饒舌にして、謹しみの覺悟に乏し。息子が、下男を合手に、鎗の稽古の眞似するをば、惡あがきとなし、數寄屋の壁に疵付けんとを懸念して、子を叱り、下男にがミ付き、子が『いや母樣惡あがきはしませぬ、私は侍ぢや鎗遣ひ習ひます』といふに反して、尤もらしく、

其方も十ぢや、その合點がいかぬか、侍は侍、しれた事、さりながら父樣を見やいの。御前も能く御加增まで下され

た。武藝は侍の役、珍しからぬ。茶の湯を上手になさるゝ故人の用ゐほんそうもある。幼い時から、茶杓の持ち樣、茶巾さばきも習ふて置きや。長々の留守の內、子供がわるう育つたと言はれては、母が浮名も耻づかしい。男の子は男の手、祖父樣へ往て、大學でも讀み習や、

と、武士の妻にして、この異見、おさゐが思想の程、大方は知らる。されば、兼々よい男と思へる權三が、眞の臺子の傳授を受けたさに、堅氣に出掛けて、優にやさしく、『天下太平長久の御代、簡樣の事を勤めねば、武士奉公秀でがたし』などゝ、機嫌とり〳〵、先きの心の思ふ壺に打ち込んだるには、なほ更、惚々とせざるを得ず。

夫の江戸留守、家內の締りをよくせねば、歸られてから面目なしとは思へども、身にひきしめて考ふるには非ず。謹しみに足らねば、家內の締り內外に心配るとては、がみ〳〵と下女下男を追ひ使ふかと思へば、娘お菊の髮のいひぶり、ちよつと見て、氣に入らず、『顏の道具相應に眉が大事の物』『兎角女子は髮かたち、』といひて、其髮結ひ直して、『それの格別よい子に成りやッた。嘘なら其鏡を見や』と、まだ夫にて

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

濟ませず、大聲立てゝ、下女飯焚を呼び寄せて、娘の自慢をなして、彼等に追從輕薄云はせ、剩へ『女子でもしんきがわく。肌身をむッくりと抱いて寐たい』『慮外ながら奥樣の手に二三日かゝつたら、お國中の男は、秋風に芒の穗、靡けてやろ』など、誰れあらう、召使たるものが、奥樣の前にて、雜言たら〳〵、奥樣、かねての仕付の程よりは、其の身たしなみ不行届なるを露白せり、而もまだ十三四の娘に、艶容ゆるかせならざれと敎ふるは、己が生素の嗜好を以て、たゞちに我子に注入せんとするもの、まして、まだ生心知らぬものに、男の批判聞かすなど、かゝる母に育て上げられては、行末はまた驅落者なるべし。

主の留守を、懸念して、心を配りながらも、一旦情熱に驅られては。心緒錯亂、度を失するは、かゝる女の常として、おさゐや、痴情獸慾の醜男が度々の付文を、『夫ある身を踏み付にする不義者』と憤り、仲使の下女に暇遣りながら、權三が傳授受けんが爲に、岩木忠太兵衞を尋ねて來りしをば、今の今、娘や下郎の面前にて、夫なくんばといひし其男の見えしに、何の考へもなく、大年増ながら、なほ若き痴男の情を動かすべき身を以て、國に名とりの美男を奥までも引き入れて、挨拶に隔てを置かす、傳授は、當方より、言ひ出したい程の塲合、早速に承知する、其代りには、娘を貰へかしと迫りながら、なほ一應の道理は知れり。

今も今とて、お噂申せし折から、かう申すは、どうやら、臺子の傳授と替々にするやうで、娘の威が落ち、大事の傳授の詮もなし、夫は夫、是は是の談合で、嫁を其許に進すれば、婿は子の相傳、市の進聞かれて滿足、第一私が戀婿と切口上にて、ハキ〳〵と賢女らしき義理立てをなせども、情念の焰は、胸裡に縱横往來して、兎角は道理を情の方に引き寄せつゝ、『第一私が戀婿』とまで打つて出し、一たび邪推の念に激せられては、『外に約束があるさうな、さうぢや〳〵主ある花は是非も無い、あつたら男に戀がさめた。』と、何が戀ぞ、娘の戀の爲の法界悋氣か、それとも我戀か。されどもおさゐや、此時まで、權三いとしらしとは思へども、年は十二の姉、夫ある身、權三に戀すとは、自覺する能はざりしも悋氣は強し、何故かとぞ、我から疑ひしなるべし。されど隱々裡に愛念の燃えつゝありしものとて、されば、かの付文が

若し權三の仕業なりしならんには、かの如くに、賢女らしき筋道は、立てとほせまじ、爰に忽然として、戀を自覺して數寄屋入りを待たずして、とくに重夫せしやも知るべからす。この理想的男子を、他人の有とするは惜しく、さりとて我れ持つべきものをと、熱狂せんも遂ぐる能はず、たゞ惜しさ、妬さに、せめて、年齒ゆかぬ娘の婿となして、半ば『わが身連添ふ心にて』これにて胸中を慰やす存念なりしなるべし。『姑が婿の悋氣は惡名の種』と覺つて道に歸らんとすれども、猶ほ胸こがす。悋氣嫉妬は多情女の性癖、しかも娘と婿と、夫婦仲好くば、姑悋氣せずにはをられぬ質なり。おさゐの權三に對するや、我がいとしらしいが、娘の婿に望むに至つて、更に情熱を加へ、而して、權三に他婦あるを邪推する時、婿の契約を得たる時、其時々に、其度を强め、權三に仇心あるを知りては、いよ／＼辛氣が湧きて、人手に渡すといよ／＼惜しく嫉妬爲に禁せざるに至りては、娘の戀か、我戀かの判然せざる迄に心猿意馬狂ひし、いよ／＼深夜の數寄屋入りとなりては、娘の婿は、たゞ口先の云前らしく、どうでも我戀を戀するらし。されども、自ら未だ之を自覺せざれば、許

さぬ處はありたるなり。浮氣、多情の女、事既に爰に到つて、一隙開くあれば、忽ち過に陷りて、はじめて、多年の戀を自覺せん。

元より才智なきに非らざれども、おさゐ多情なる女なれば、情に狂して、理を忘れ、いかに娘の婿とするものとはいへ、深夜これを、竊に人無き數寄屋に誘ふて、誤つて魔室に入り端なく、不義の汚名を受けたり。罪を犯さずとするも、既に魔道に闖入するの不用意をなす。不義の罪惡は情狂の不用意に基く。おさゐの擧動、機一髮の危に臨めるもの、なんぞ過ちなしとせんや。而も、不義呼はりをせられたるが、機となり、全くの不義に心を陷れ、權三は流石に武士、直に切腹して、身の潔白を立てんとせしを、

是非も無い、最早此二人は生きても死んでもすたつた身、東都にござる市の進、女房を盜まれたと、後指をさゝれては御奉公はおろか、人に面を合はされまい、迚も死ぬべき命なり。只今二人が間夫といふ、不義者に成りきはめて、市の進殿に討たれて、男の一分、立てゝ進ぜて下され、なう忝なからう。

おいとしや口惜しいは尤もなれども、跡に我々名を清めては、市の進は、女敵を討ち誤まり二度の耻と云ふ者、不肖ながら今爰で、女房ぢや夫ぢやと一言いふて下され、と、勝手なる理屈を付けて、『權三が女房』『お前は夫』と遂に劒の山に坐して、意外の夫婦の、あやふき縁を結びたるは、市の進といふ男が無いならばの情、此理屈の根抵をなせり、これ到底おさゐ如き、情に狂する女子が、急に臨んでの智慧なり。されど『忌々しい』の中にも、既に急場を逃れては、『若い殿御を我ゆゑにくづされ姿』にさせたる歎きはあれども、なほ、理想的なる男子其人と、一日半日なりとも、夫婦らしく、道行に、人に振り見らるゝに、耻づかしながら、嬉しき感想ありて、戀の苦しみの甘きを舐むるの心地なしつゝ、されば こそ、女敵打たさせたしとの本意ありながらも、一日の生命を永うせんとて、見付けられじと、逃げ隱るゝなれ。女性の情念の、如斯に發展するは、其自然なり。不義は女の道に非ず、されど、世上浮氣多情の女子、初めは、誤つて、之に陷り、後之に馴れて、危きになほ樂しむものあり、おさゐは即ち之なり。

されどおさゐは、夫市の進を棄てたるものに非ず、いとほしの子にて繋がる縁は、飽に飽かれぬ仲なれば、情狂の過ちに、意外の重夫をなしながら、顧みては、

思はぬ難に名を流し、命を果たすお前もいとしいは、愛しいが、三人の子をなした二十年の馴染には、私や代へぬど。

といひ、また『寡のつまの留主守り』と憂ひ、將に夫の手に懸らんとして、『なう懷かしや』と寄り付く、ア、何等悲痛の情ぞ。之に愛なきに非ず、此儘にして添ひ遂げらるゝものならば、おさゐ、終世を權三に寄せん、されど、斷ち難き馴染は彼に在り、市の進は棄て難し。情緒錯亂、貞節戀情の岐途に迷ふ。

おさゐ、多情の質、故に意思に弱點多く、情念の狂動に、賢女の志を打忘れつ、矛盾の擧動を演出して、意料の外に、二十年の馴染を、一時の過に代へて、一命を果たせり。巣林子、よく此種の女子の情性と弱點とを識りて、其發展の一面を描かんが爲に、此おさゐを擧げ來る。波の鼓のお種、柱暦のおさんも亦殆ど類を等しうするものなり。然れども豈にたゞ彼等戲曲中の人物のみならんや。其過失に陷るの有無は

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

問はず、世上今昔、おさみ一流の女子ある尠しとせず。予はおさみ等を觀じて、彼等の哀なるを愍むや切なり。

田舍に於けるお嫁樣

紫琴女史

都合にて、當世風の奥樣といへば、直に一家の主婦と聞ゆ。隨て御隱居樣と呼ばるゝ姑君は、先づ眞の御隱居樣に近きが多し。されど田舍にて、姑ある家の嫁といへば、いふ迄もなく、主婦は姑にして、嫁は毫も主婦たるの觀念を有するを許されざるなり。一方よりいへば無給の婢、他方よりいへば、其夫と結婚したるにはあらで、其家と結婚したるものなり。此際に於る夫は、家と嫁との間に介する、一個の連鎖たるに過ぎず。故に夫は假令其家の、戶主たる地位に立てるにせよ。戶主に配する主婦との觀念を抱き、專斷に世帶を切廻す事あらむには、夫れこそ不測の一大事をも惹起すべく、村中の大評判ともなるべきものなり。男は息子が戶主なるも、女は戶主の母なる人を主婦と思ひ、紙一枚も私擅に出納する事なからむには、大々的極上温和のお嫁樣とはいはるゝなり。悉くとはいはず、されど多數を通じての風習は是に過ぎず。

されば嫁には何等の家事の責任もなかるべきかといふに、手足を勞する方面に於ては、大に否からざるものあり。勞働の要務を辨ずるに、一々姑の指揮を竢つやうにては、完全なるお嫁樣とはいひ難し。早くいへば姑君の身躰は隱居させまして、お心は主婦たるの御意を伺ふものとせば、決して誤りなきが如し。假令ば晩のお菜を何にといふは、心的主婦たる姑君の指揮を乞ひ。お詞下るや否身躰の主婦たるお嫁樣は、遺憾なき器械として、鹽梅の責を一手に引受るが、何よりの秘訣なり。其他髮の結ひざま、他所出衣裝の撰擇取捨等微細の邊に至るまで、己がものとて、勝手に結び替へ、着替ふる事なからしむるは、一般に温良のお嫁樣とはいはるゝなり。換言すれば、姑母の心と、子婦の身躰を合すれば、始めて玆に一個の主婦といふものは成立つなり。さるを嫁に主婦の心あり、是位の事はと、おのが意一ツに家事を取計らはむ事は、田舍のお嫁樣としては、此上もなき禁物の第一なり。

勿論田舍といへども、單に都鄙の區別にのみ依るべからず。畢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

竟此風習の今も田舍に時を得たるを以て假稱せるのみ。確實にいへば、是ぞ舊日本の家憲なる。されど田舍にては、誰も是を舊慣と思へるものなし。さゝれ石の巖となるまで、かくあるべきものと信認せるなり。其は新らしき風の、そよとも音信ねばなるべし。故に嫁するやがて、主婦の地位に立てる嫁君あれば人は是を一奇觀として、喧傳するに忙し、此鄕に遠からぬ或村の如きは、尙ほ且是よりも太甚しきものあり。嫁は姑の生存中世帶に手を觸る可らざるは勿論、自己の身體に關する費用は、油元結と、食物とを除くの外は、一切夫家に仰ぐを得ず。足袋手拭より、衣服の染め替へ費用、縫ひ糸に至るまで、里方より辨ぜしむるを以て、一村の風習とはなせるなり。而して子供の生るゝ場合には、里方の貧富と、姑の氣質とにより、多少の取除はあるにせよ、少くも三四人迄は里方に歸りて生むを以て恥辱なき方法とすといへり。夫れも、今生るゝといふ間際まで、夫の家に働らきつゝすわといふ際に夫の家を出、里方へ歸る途中に安產せしといふなどは、此上なき名譽といふ事なり。さるを早くより周章し、生るゝ迄の二日三日を、里方にて待ちたりといへば、婦人としての恥辱此上なかるべしとは、如何に危き呼吸には非るか。さあれ產前の餘裕を許されざる代り、產後は四十日間を里方に休養するが定めなりといへば、お嫁樣も、此間に少しは落付き玉ふなるべし、夫れに就て可笑きは、生見に送られたる諸方よりの祝ひものは、悉皆夫家に歸すべきものなればか、如何なる祝ひものを送るにも、必ず夫れに白米二升宛を添へ置くが儀式なりといふ。思ふに個はお嫁樣が里方滯在中の飯米にとての事なるべし。されど祝ひを寄せたる人を始め、全村の人を饗應する祝賀の筵は、里方にて開く事にしあれば、其費用を差引ては、白米二升の代價は、寧ろ來客が酒肴の料には足らぬなるべし。夫より後の子供に對する、里方の負擔など、都會に比しては、比較的煩はしく夫家との分擔多きやうなれど、さばかりはとていはず。兎に角万事につけ、娘持てる親は、よほど割合惡しき作法とて姑の存在中は、他に嫁したる娘の、身體は夫家に、費用は半以上里方の負擔たるを免れじとぞいふなる。娘三人持ちたらむ家の棟は、扨こそ墜つるが當然なり。されど此村に生立ちたる人は、一般に個を以て敢て不道理なる習とせず。故に是だけの事を聞出さむにも、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

よほど力を込たる疑問を呈せでは、彼方に何等の感じを與へず。随て彼の口より自然の材料を得むなどは、なか〳〵思ひもよらぬ事なり。僕は我妹の幼きより此村に里子として遣られたるが、住めば都の其所に土とならむ初一念を貫れつゝ今は二人の子の母となれるものより、辛うじて此風習を聞得たるなり。依て其は餘りの不道理ならずやと、時に或は挑發し試むる事あるも、彼は平氣にて、少しも自己の村を疑はざるなり。強ていへば、何處其處の村は、また〳〵是より太甚しきものありとはいふ。是より太甚しきものとは、生涯の飯米持ちてお嫁様に行くものにか。聞かねば知らず、聞けば嘸かし奇異なる風習多からむ。さはいへ夫家に養はるゝが、敢て名聲の事にもあらねば、寧ろ共同の生活ともいはゞいふ可き風習は、却て進化の狀態に近きが如し。されど責任のある所權能の相伴ふと克はず。身は實在の主婦にして、心は心的主婦たる姑母の指揮に一任するの虛無をこそ要すとせば、舊家風に於るお嫁様てふ地位は、寧ろ完全なる器械を以て充たす可く、活力ある人間としては、餘りに遺憾多き境遇なり。さあれ幾百世を斯して過來りし事にしあれば、今將た誰をかも咎む可き。白髪の生ふる夫迄は、幾人の子の母とはなるも主婦たり難く、姑となりし時代に於て、始めて主婦たる權能を獲取する習ひなれば、今日既に姑たる人の、如何ばかり嫁を無視し玉へばとて、是も昔は窮屈なる嫁菜の、春には逢はで、秋の野を我ものに、萌えむとし玉ふものなれば、寧ろ同情は女同士の、老たるにしも濺ぐ可きが當然なる。彼も是も氣の毒は、舊家風に於るお嫁様の地位にぞある、あはれ都會の今風に、時めき玉ふ夫人方よ。春は田舍に探梅の、夫れもよけれど、他所眼には、樂しと見ゆる賤が伏屋の其奥には、女の身の春は惜まで、秋をと待てる露けき袖を、音信れても見玉へかし。さては御隱居様の御不足、夫れも少しは和らぐ可く、良人に迫り玉ふお聲の、轉じては、田舍の嫁御寮が耳邊に囁く嚔めの、福音ともなりぬ可し。兎にも角にも、都會に於る少數新家風の一致は、未だ日本の全土を覆ふて化石せる舊家風の一致を打破せしの證左とはならざるなり。

今や我國の政治は、不完全ながらも、國民の代表者によりて左右し得べき運命には接したり。されど一堂に會して事を議す可くもあらぬ四千万農家庭の改革を如何はすべき。彼は同

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

臭味を帶べる三百の頭腦に方て事を決すべきの便宜あるも、是は否らず、漆黑の散髮、霜白の兀頭、束髮丸髷乃至は芥子坊主の末に至るまで、あらゆる種屬を包括して殘すなく、しかも一人の代表者を擧げ難き勝敗を、何によりてか決すべき。眞個眞面目の研究を要すべき問題なりと、土臭き香を都の風に匂はすも、田舍の嫁御寮が花の唇堅く結んで解けざる風情の、いかにも〳〵氣の毒さの餘りなり。

山寒月　池袋清風

小夜あらし木の葉さそひし山の端に
殘るもさむしあり明の月

暮山眺望

山陰に眞柴の烟たつ見えて
夕日きえゆく峯の松原

雨後冬月

雨すぎし庭の落葉に月影の
まばゆきばかりてらす夜半哉

評論

明治三遷論

靜淵學人

熟々明治の歷史を通觀するに、自ら三回の變遷を區劃し得るが如し、而して今や漸く最後の新時機に入り、新着手を爲すべき時代に非るなき乎。何をか三變遷と云ひ、新時機來ると云ふ乎。

維新改革の當時は舊文物を排斥し去り、泰西の新文物を模倣するに急なるの時にして、政治は王政となり、法律は大寶の律令に基き唐明清の三律を參酌したる新律綱領(三年十二月)となり、直ちに翌年改定律例となりて現はれ、陸海軍は幕府時代の組織に加へて英佛獨の長所を取りて漸次に變遷し、岩倉の大使派遣となり、西鄕の征韓論によりて端なく內治主義者の勝利を來し、總躰に於て政治寧ろ官制上の改革、則ち郡縣制度の設置を始め內政改頁を唯一目的として走りたるは、第一期の上半となす。

上半期は西洋の文明に篤き之に後れざらんとして、文物制度

の變更を急ぎたる時代なれば、千變万化の渦中に捲込まれしも進取活潑破壞の精神を以て滿されき、而かも之れ政治を根本としたるもの、其政治のみを以て滿足せざるは當然なり。

果然、社會改良の聲加はれり、政治上に於ては英佛の十八世紀的思想の刺激より自由民權を主張し、國會開設を請願せると同時に、又社會上の問題に入れり、曰く女權問題、曰く廢娼、曰く禁酒、曰く何、已に第一期の上半に於て其聲ありしが、重もに明六社派にして、社會階級的改良に屬せるもの、及人權に關するものなりしが、此所に入りては下層の人民、並びに婦風上に關するものとなれり、社會改良問題及び、社會哲學に關する書類の多出せるは實に明治十三四年より、二十年前後なり、ルーソー、ベンザム少しく下火となりて、ミル、スペンサーの愛好せられし時とす、之れ第一期の下半なり。

下半期は、政治上民主主義の聲凝つて、國會請願となれると、一般社會改良の聲高まりし時なり、而かも其社會に關するものも政治に關するものも、多くは西洋の刺激、西洋の模倣、換言すれば西洋風の最も烈しかりし影響なりき。

西洋風の絶頂は、國粹保存（主唱者の眞意を誤解したりとするも）新保守、則ち西洋文明に反對する思想の高まりを促したりき、茲に於てか、新舊の爭あり、宗教上には遂に宗教教育衝突論となり、教育上には教育勅語を見、從來の西洋主義、耶蘇教臭味を嫌忌する風を起し一時隆んなりし宗教學校も衰微に傾くとなれり、蓋し學制の變更、官學出身の便利、保守思想、歷史的回顧の勢力によりたるにて此力は日淸戰爭前後まで、繼續し尙繼續せんとする者もあり、森文相の變死は開化主義者に一撃を與へ、井上文相となりて、國家主義寧ろ獨逸流の思想高まりて、大學始め一般官學者流を驅て此潮流に捲込みぬ。之れ第二期上半なり。

此上半期は、思想に於ては保守的なり、日淸戰爭によりて或者は其勝利を以て國民の能力已に判明せりとなし大に虛誇するに至れり、寧ろ世人一樣に此潮流に入りたるが如し、戰勝の結果は、三國の干涉となりて軍備擴張の增大となり、外交上に注意すると更らに深きを加ふるに至れり。

余輩は日淸戰爭を下半期の起點として、其後の變遷を見るに今や漸く第三期に入らんとす、則ち三度目の變遷を見んとす

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

るものと觀測するなり。
兩三年來、及今年の如きは、其三度變遷せんとする準備時代寧ろ一歩を踏み出せるものに非る乎。見よ、第貳期の殘物と新期に入らんとする者の勃興し來れるとを。殘物とは何物か保守思想、歷史的回顧の因緣を引ける昧者の安奮主義なり。或は國家論の假面を被りて僞忠君を唱ひ、內實自家の生活上に汲々するもの、一類始め、藩閥を賴みて依然其勢力を維持せんとする政治家、及び之に附從し提携し盲從して、賣節變節毫も恥心なき議員、並びに宗教上には公認非公認を一大事として喋々し其形に拘泥する者、軍備擴張外亦他を知らずして國民に重稅を課するを恥ぢざる輩は云ふも更なり、學術上制度上始め社會一般の事物に對して保守の思想を以て主とする一類則ち之れ殘物なり、此殘物は第貳期の沈澱物にして今尙ほ表面上多少の勢力あるが如し。新期に入るべきは、其勢力未だ微々たりと雖も、今後の主人公たり。新思想の潮流に掉すもの皆之れに入る新問題に着眼するもの皆其友なり。則ち政治上に於ては議會の爲すなきを視し、議員の腐敗を矯正せんとするもの其一、彼等が墮落腐敗して今日の狀に陷れるは第貳期に於ては未だ測知せられざりし所たり、第貳期上半は多少價値あるものとして議員を見、議會に屬望したる時なり、近來の腐敗は寧ろ其爲すなく、品格の下卑なるに飽き、新改良を施すの時機近けるを示せるもの、之れ第三期に爲すべき一事業なり、歲費增加、稅金增加は第三期時代の殿の惡兆標本として指摘して可なり。次は社會問題なり、今日の論者は未だ研究者にして、畢竟机上の論說、學者の玩弄物たり書籍上より得たる一部の智識の撒布、而かも珍らしげに喋々喃々するに過ぎざるも、之れ準備のみ、經濟上の變遷が此聲をして高からしむるは自今以後の事なり、此潮流に掉すものは、世界上に於ける二十世紀の舞臺に立つの資格を要すると同時に、其主人公たる位置に立つものなり。次は外國貿易なり、今日盛んに海外に渡航して外國貿易に從事するは、殖民上、人種競爭上、外交上、國力擴張上大なる必要にして、內地に在りて空談虛論、小事に汲々たる者に比すれば其價天地雲泥の差異あり、此點に着眼して奮然立つものは實に國家を救ふものと云ふべし。次は外交なり、制度文物の研究摸倣時代は已に去り、今や各國々勢の活動する次第、時々刻

く新現象を呈する狀態を察し、此に機先を制して列國の間に屹然として立つにあり、之れ彼の徒らに自主的外交と云ひ、外交的研究と云ふ學者の爲し得る限りに非ず、列國の新形勢に通じ、至誠虚心にして實際に手腕を振ふ者に非ずんば此問題を解釋せんと難し、外交上に立入るもの豈に一の政治家のみならんや、國民亦活眼を開いて其の後楯たらざるべからず、這般の消息に專心苦慮するものは、實に新時期に要するもの、是れ新期の一大要素たる資格を存するものとす。次は何事にも先見を養ひ、事後の狼狽を爲すなく、事の起るに先ちて之を暗裡に豫防し、單に發表せる所に暎然して之を治療するに唯力むる如きとなく、豫言者明先見を有し、機微に投れて處置し得る快腕家、換言すれば故海舟翁の如き人物は特に新期の舞臺に要あり、決して欠くべからざる本條なり。次は會社腐敗の今日、第二期の殘物の浮動攪亂止まざる時勢に在つては、宗教と教育との根本的治療術、及最先的治療法の施さるべき、家庭の整理、教育、兒童の發達等に盡碎し、新聞的臨名を貪らず、無爲なるが如くして有爲なる宗教家、教育家の一部は之れ亦新時代に入るべき人なり。フレーベル、ペスタロチ流を没むもの則ち之れ、滔々たる所謂學校教師の如き豈に一毫の價値あらんや。次に政治上に於ては徒らに政黨政派の起伏に拘泥せず、至誠至能の實力に應じて民力の發達を計るものなり。進歩黨なるもの素より吾人の意を滿たすに足らず、彼れ黨派的關係によりて上下するを免れざるも、今日の處置、之を自由黨に比すれば遙かに上乘に位す、而かも政黨外、眞面目の心を以て彼等を制裁し、彼等を刺戟し教導する少數の有力者は、新時機の主人公となるものなり、今日二三の政黨あるも、吾人は公平誠實の少數ある政客に與みせんとす。是等の者の多少存在するは、新時期に至るの準備時代たるを表するもの也。特に内地雜居は、格段の變遷を與へすとするも此事の中心となり、寧ろ此時機と前後して起る現象は、凡て新期に入の準備思想なるべし。新期は何の時にか來る、或者は已に新期に入りたるなり、今日來り、明日來るとして待つべきに非ず、今日此頃は、其時機の變遷する次第、稍明瞭となれるに非ずや。時期は風の如し、之を抑へ、之を待たしめんこと難し。余輩の見によれば、明治には已に貳回の變遷を經たるものなり、今日此頃は已に第三期に入りたると入らさるとのある時にして、而かも未だ入りしもの少きも將に入らんとす

二〇

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るもの多出せんとする時たり。
夫れ第一期上半は破壊して摸倣に務めたり、下半期は摸倣して飽きたり。第二期は飽きて反動したり。第三期に至りては進捗的にして調和的たり。活動的にして世界的たるべし。此主義思想に反するもの必ず破滅するを免れず。
第一期上半の弊は只管破壊に傾きたるにあり。而かも短所茲にありて長所亦之に存す、此の摸倣的勢力にして縮少せば、其後の長所を見ざりしならん、聞く曾てラベレー氏新渡戸稲造君に語りて曰く、貴邦の封建制度を廃したるは痛恨の至りなり、是れより自由權利の徒勃興して純朴の氣風衰へ、地方の繁華は中央に集り、將さに集權の弊に堪へざらんと。自由權利の説は實に第一上半期に唱道せられ、下半期に至り遂に國會開設となれたり、而して中央集權の弊害に至りては、其下半期以來年々歳々甚だしきを加ふ。結果より見れば實に斯の如し但此弊は新期に入りて能く徳川時代の自治制に鑑み、農業を奬勵し今日の所謂自治を實施して其間自ら弊ある所を以て補充する所なかるべからず、地方村落には政黨の軋轢により、甲派村會議員の多數を占むれば乙派納税せず、乙派亦

之に倣ふて常に自治機關の運轉を妨害するもの一二にして止まらざるを見ば、政黨競爭の意外の邊に弊毒を流せるを見るべし。第一期に於ける所謂改革の無鐵砲なりしは、歷史上大に注意すべき事、今日に至りては其矯正に着手するの外なきなり。
第一期下半の弊は、摸倣に力むるの激烈なりしにあり、假裝會鹿鳴館に催され、泰西の奴隷的思想を有せるにありき、而かも短所は亦長所の存する所、西洋にては彼が如きか故に我亦斯くすべしとの單簡なる前提は、矯風上、人權上に偉大の感化を與へ、可憐のものを惠まんとし社會の弊風を彼我比較して矯正せんとするの潮流ありしが爲めに、宣教師は女子教育にも奔走し、廢娼論も出で禁酒事業も行はれたるなれ、政治と共に一般社會に至るまで西洋風を移さんとするの勢ひ、驅りて以て社會改良論を起せるもの也、故に一面を見て排斥せんは、盲者の推察に異ならずや。
第二期の弊は、前者に反動して保守的となれるにあり此時機に於て人民進取の氣象を害し、其極藩閥者をして生命を永からしめ、國民的驕傲心を徒らに高め、西洋列國の事情を研究する念を低め、引いて保守頑固の氣風を助長し、内治的にし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

且つ戸内的の思想を起し、歴史を知らざる輩の獨逸主義を流行せしめ、海外思想に數歩を後れ、僞忠國僞愛國の僞物を起して、宗教心を抹殺し、其極物質的形式に拘泥し、議院に過大の尊敬を拂ふて、海外の弊習如何をも知ると能はざらしめし如き擧げて數ふべからず。而かも多少國文學の勃興を來し、戰爭によりて國民に自覺心生じ、三國干涉によりて外交の難とを悟り、今や此期の去らんとするに當りて議會の腐敗せる狀を覺えたる如き、せめてもの長所たり。人或は第貳期時代を以て偏せず黨せざる國民自覺的時代とするも、之れ將に第三期に入るべき一微候を捉へたるにて、實は最も長所少なく、短所多きは第貳期なり。之を戲曲の發達に比すれば、抒情的戲曲の希臘劇は、情を主としたるものにて、第一期は之に相當す、假面を被り歌舞の補助を假り情を主として狂へり、之れ情劇なり、夢幻劇なり、一年にして法律を造り翌年之を改定し、英に獨に佛に摸倣して隱現出沒定めなく、財政の困難も輸出入の不調和も一切關せず、夢幻の如く騷ぎ廻れり。第貳期は抒事的戲曲の如し、否な其一部分を摸倣したる我國の史劇の如し、沙翁の史劇と比すべからず、故に其歷史

的回顧あるも活歷劇の如く單に保守念を燃やし、團十郎的活劇を摸せんとして、古典の崇拜、曲解、古文辭復興、神代記禮拜と化し去りぬ。故實搜索に走れるなり、多くの小西鶴、小馬琴を出せり、小說家をして跋扈せしめ、國文流行熱を起せり、而かも文辭外に價値なきもの、科學研究の用に立たざるものを唯一崇拜したるが爲めに夢幻劇と均しく常識なき小說家文學者を出したるに過ぎず。第三期、則ち今日以後の日本社會は其二者の偏勝せる所を取り、情に偏せず、史に偏せず、主に拘らず、容に泥まざる。戲曲的戲曲即ち純劇、性劇と稱するものに進まんとするが如し、又斯く爲さゞるべからざるなり。純劇は個人の性格を骨髓として理想的寫實、寫實的現想たる如く、國民の精美なる所を骨髓として、外より又は內よりして其美所を培養し發揮すべし、國家といふ一機制內の故實に偏せず、凡て民性の精美に顧み、世界の廣きに理想を呼吸し、自國と他國とを兼併する傾ほ、戲曲の主客を要有する如くなるべきなり。切言すれば保守的固陋中よりは秩序に屬する方面を取り、急進的想中よりは進歩の分子を取り、智識上には內外自他の區別を撤去し、堂々として列國間

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に濶歩するに至るもの、之れ日本人民の純劇時代に於て行ふべき所、此の如きは今日此頃の誠實なる人士の汲々として盡力すべき點なり。此活舞臺は、二十世紀にして、我が明治時代に於ては從來の變遷中に見るべからず將に第三期に見るべきもの、而かも、今日現在せる誠實至公なる人士の盡力如何によりて、悲劇となるか、喜劇となるか、悲喜混交劇となるかを決するものとす。悲喜混交は人生の常相、吾人之を辟せず、其悲劇となして大切りを結ぶが如きは、不祥夢にだも見ざらんを欲するなり。

鬼面百相（第二）

青柳有美

▲美人の不德にして妖婦たるの傾あるは、自然の配合の最も妙なる者也。是れ猶ほ、色美はしき花片の毒を含み、羽燦めける昆蟲の、人身に害あるに同じ。美人にして德備はる者ならば、世の德あるも醜き女人は、果して如何にせんとするか。

▲日本人は將來必ずや、あぐらかく人種となるべし

▲己れの知れることを、悉く他人の前に、さらけちらす如き人は、亦己れの知らざることを、誇り氣に吹聽する者也。

▲淀める溜池の如き安靜は、決してこの世に來らず。視よ、天地には一の安靜なく、變轉無情悶亂、極りなきに非ずや。されど又、自らなる安靜あり。故に無常變轉、是れ即ち安靜なり。黄金時代の安靜とは、蓋し此の如きものならず。

▲英人は詩の國民にして、佛人は畫の國民、而して獨逸は樂の國なり。魯人は之を稱して建築の國民といはんか。

▲或る朝夙く起きしに、荷馬車の街路に轆る音す、馭夫、是に於てか、その軸に油注がんとして曰く「車の泣くのをなほしてやらむ」と。彼れは車を以て人格あるものとせるなり。

▲方丈記は、傳道之書に、その思潮と其章句と、共に相似たり。

▲今や、ゾラは國外に放逐せられて、當に一の亡命客たり。かの春水が越前守に捕へられて、牢獄に呻吟せしにも比すべきか。其人物に大小高低の差こそあれ、共に諷刺的の氣味あるに至りては、稍々一なり。

▲法士傳教者たらん身は、貧きものの前には謙り、貴きもの富めるもの高きものゝ前には、須く大に威張るべし。

▲風前の燈の如しとは、オフヱリヤを評すべき一語なり。

▲天才は、常に想を兩極に走らするものなり。例へば理想絕對の善を考へ、社會の極端なる醜惡を念思するが如し。

▲條蟲の下りかけたる時、之を手にて引けば、却て拔き出すこと能はず、中ばにして切れ、其餘は腹中に止るといふ。然し、躰温と等しき微温湯のうちに、腰を入れて安んじ居れば、虫は悠然と匍匐ひ出で來り、腹中は其跡を絶つに至ると。友の悪を拔かんとするも亦此の如し。如何に之を責めたればとて、決して癒るものに非ず。却て其人の心になり、同情を以て之れに臨まば、必ずや煩悩を解脱せしむるを得ん。

▲妻は、その夫を精神的に殺して、肉躰的に生かすものなり。妻なくんば、よく想に沈み靜思を續け、幾數日なるも妨げなし、既にその精神は生く。それど、命は之によりて縮むべし。兎角に、難有くしてしかも迷惑なるは、妻なりけり。

▲人の理想に畫かれたる博愛は、假へば幾何學に所謂『廣り』の如し。之を理論の上にいへば、「線とは長サありて厚サなく又幅なきものなり。」されど、人の畫く線には幅あり又厚サあり。此の如く、理想の博愛には、彼是れ厚薄なしと雖ども、實際の博愛には、乃ち是れあり。

▲詩は讀者の範圍狹く、小説は廣し。故に詩人にして若し後進のために押し退けられんとするの徴あらば、須く是れまで

賣りたる名を便りに、小説家と化し去るをよしとす。必ずや賣れ口よからん。是に於てかスコットは利巧ものなり。

▲ハムレットに曰く,This brief as woman's love.『それは、女人の戀の如く短かし』と。女人の戀ほど、消え易く頼み難きはなしと見えたり。

▲今時の利巧者共、事を依頼する毎に、必ず『先生』と書き來る。又おかしからずや。

▲悪魔は敏腕家なり。

▲日本人は、ペルシヤ人に似たりといはんか。希臘人の如き獨創力なく、希伯來人の如き高遠の意氣なく、素より羅馬人の精到明識なし。徒に妄想に耽り、人眞似に汲々たるところ、頗るペルシヤ的なり。其末路も亦ペルシヤ的ならずんば幸なり。

▲門閥高貴の家に生れたる女ほど、氣の毒なるはなし。心ある男子、閨閥の譏を受んことを恐れて、其門に入らず。是に於てか、徒に無腸巧言の男子と、伉儷を契らざるべからず。有爲超俗の士人の、此種の女を娶る亦是救世の大慈悲ならずや。

▲眼は智力を示し、口は意志を現はす。情に至りては、それ額の肉より迸らんか。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

▲肉多きは愚人の證なり。

▲相貌に於ても、兩極は相接するものゝ如く、想像力の著く發達せる人は、その風相頗る躁狂性の狂人に似、默想沈思に樂む人は、又頗る白痴の相に近し。

▲カーライルの血は、動脉血のみなり。されど、ベーコンの躰軀には、動脉と靜脉との兩血流あり。

▲理想は、進化の天則を成就せんための動力なり。故に必ずや、無生物のうちにも之れあらん。

▲掏摸も仲々に大切なる天下の必要物にて、人間の注意力を敎練發達するに、預りて力あるものなり。かの田舍者の間抜顔にして注意力の散慢なるは、掏摸の横行を夢みざるによる。

▲掏摸盜賊の輩を以て、勞することなくして坐食する遊惰漢と思ふは蓋し過れり。その經營慘澹苦辛煩慮、日もまた足らざるが如き、大に見るべし。なほ學者の學を磨き、藝術の士の、その製作に念を専ちにするに同じ。この苦心あらば、何處に行くも相當の收入を得んこと、決して難からじ。彼等の分捕は誠に此經營の報酬なるなり。是に於てか、昔の世にありてスパルタは、竊盜を公許したり。

▲佛人多く詩を作らず。然れども詩に醉ふを悦ぶ。是に於てか、詩に關する文字の富贍にして數多きこと、遙に英吉利語に勝る。假令ばLyrismeなる一語はよく英のPoetic enthusiasm(詩的熱情)の意を示し、またGesteなる一語もHeroicPoem(傳奇詩)のこゝろを現はすか如し。

▲獨逸語に、連接語の多きは、よく其國民の論理的にして、しかも、組織的なるを證す。

▲英吉利の、昔ノルマンデヰーを得て苦みし如く、米國もし比律賓を得ば、必ずや苦まん。日本の三韓を得たりしも又然かなり。

▲涙なくんば、婦あることなし。

▲日本美術院の一派は所謂ローマンテヰック派とも云べきか

▲大化の新政における土地法は、全くかのヘンリー、チョールヂが單税主義に合するものゝ如し。

▲楠氏の南朝のために、心身を顧みざりしは、後醍醐天皇、正成の田舍武士たるを棄てずして、之に討賊の大任を下されたる特殊の知遇に感激せし故なり。豈に今日の小學先生が所謂冷き、忠義心によるものならんや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

▲批評家は草刈男の如し。雜草を抜きて、よく花實を榮へしむ。

▲亂世に英雄の現はれ出るは、砂利を振るへば、石ころの浮び出るが如し。故に亂世は、浮世の篩をふるふと知れ。

▲音樂は知るべきものに非ず。感ずべきものなり。然るを物知り顔する樂評家のおかしさよ。

▲少しばかりの拂に穢く、之に惜しげの顔するは、少しの入りを悦ぶ人より、賤しげに見ゆるものぞ。

▲或る山の神曰く『何處の子でも、笑つて居る時は可愛いが、「ギャー」と泣かるれば、自分の子でも厭やになり、頭の一つも、なぐりたくなる』と。

▲リンコルンの面相と秀吉の面相とは、共に猿面にて、頗る相似たり。

▲人間の頭はるつぼなり。

▲敎會は、須く三位の性質を備ふべし。(第一)寺院(第二)講壇(第三)俱樂部これなり。

▲敎會を男女の見合所など呼ばれたりとて、譯もなく氣にする篤信家あり。敎會はよろしく男女の見合所たるべし。要ふるに足らぬことならずや。女郎屋料理屋待合はては人眼を盗む見合などより、敎會の見合の勝ること實に數十等なるぞ。

▲歩行の平均を得んため、最も必用なるは雙手なり。

▲情熱家、もし成人の頃に至らば、その情熱を消費し終り、漸く本性の人となるべし。例えばかのバイロン、ゲーテの晩年の如し。これなほ近視眼の老年に至りて、稍々正視に近づくが如きか。然りと雖ども、青年の時、冷靜にして本性なる人は、老年に及んで、耄弱するを免れず。これなほ正視者の、老て遠視眼となるが如けん。若きうちは、狂ふ程がよし。

▲己れを他人の前に吹聽せんと欲せば、先づ己れと同性質の人を讃めよ。これベーコンの敎なり。

▲ベーコンとは、人情物理學に精通せる男なり。後來我れ若し人情物理學を構成するの期に會せば、その骨子は乞ふ之を同氏の小品文中に探らん。

▲言葉の父は靈體にして、其母は肉體なり。

◉女學雜誌第四百八十二號の評數多き女學雜誌中一頭地を抜き斬新さ清麗さを以て推さるは此雜誌なり卷頭に海舟先生の行事あり蓋し巖本氏が親炙して立筆せしものに係る讀んで坐ろに巨人の面影を忍ぶべし其他花閑隨筆を題する紫琴女史の文あり隨感あり雜錄あり(新愛知三月十日)

單稅太郎ガルスト氏

青柳猛記

(附)『單稅』論の大意

地代をして、地主の所得たらしめず、之を國家の所得たらしめ、しかも、國家唯一の稅源たらしめんとするは『單稅』論の趣旨なり。『進歩と貧困』の著者ヘンリー、チョールジ始めて之を稱道す。蓋し博愛仁慈の精神に外ならざるなり。今より大凡廿年前、支那人の北米カリフオルニヤに來りて砂金の採掘をなすもの多く、其收利少からず。米人時に之を嫉んで、砂金地の貸與を拒絕するに至れり。ヘンリー、チョールヂ、慨然として之を憤り、且つ以爲らく『支那人の收利は其勤勞の報酬なり、米人たるもの素より之を妨ぐべきの權なし。然るを、砂金地の貸與を拒絕して、之を妨げ得る所因のものは、全く土地私有の弊に外ならず』と、茲に土地國有の正理なるを頓悟し、ひいて『單稅』論をなすに至れるなり。

夫れ、地代の起る所因は、社會の存在に基するものにして、無人の地、一厘一毛の地代なきは、事の最も瞭かなるものなり。その地代の騰貴するや、偏に社會の發達進歩し人口稠密たるに至るの致すところにして、今日の所謂地主なるものが、寸毫の力を添へたるにも、これ因らざるなり。然らば、彼の地主輩が、些かの苦勞する所なく、安然飽食逸居して、その地代を懷にするが如きは、非道の最も甚しきものにて、切りとり强盗の類と何の撰むところかあらん。地主退くべし、地主倒すべし。地代は社會在るの賜なり。乞ふ社會をして、社會の作れるところを得せしめよ。然らば一切の租稅を廢止するも、一國の歲出を償ふて、なほ餘りあるを得ん。これ、實に『單稅』論者が主張なり。ヘンリー、チョールヂ一昨年を以て逝きしと雖ども、其徒皆な多くは熱實にして、益々主義の擴張につとめ、米國の如き近頃この說に靡くもの愈々多く、ニュージーランドは、既にこの『單稅』制度を實行し、ために生産の增加して産業社會の發達驚くべきものあり。賃銀の昔日に倍せること五割乃至一倍之なり。蘇格蘭のグラスゴー市會も『單稅』に贊成の決議をなし、ニュー、サウス、ウエールスにては、地租を非常に增徵して、殆んど他の租稅を

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

除く、頗る『單稅』の制度に近づき、以てその空理ならざるを證せり。

斯る經濟論を始て我邦に傳へ、遂に一命をこれがために殺ろせしは、米國クリスチヤン教會宣教師ガルスト氏となす。今や、交通機關に課稅せられ、消費のために酷稅を拂はざるべからざらんとして、氏を想ふの念、實に切ならずんばあらず。英米の宣教師、その數多しと雖ども、奇彩燦爛として狂熱その身を蝕へること、氏の如きは蓋し稀れなり。その人と談るや、必ず『單稅』ならざるはなく、食ふにも飲むにも笑ふにも衣るにも、終始『單稅』の語を絕たず。曾て、米國近時の帝國主義を謂りて、比律賓占有の不法を責るや、答て曰く『米國が其名目に於て、比律賓を占領すると否などは、必ずしも大いに非ず。されど、今や、我が合衆國の資本家、旣にすでに人を彼地に派して、その土地の買收に着手し、土民の之を所有するもの、概ね是れなきに至れるや必せり。ことに其民を壓服苦辛せしむる所因にして、我黨の最も恐るゝところなり』と。人誰か其智言に服せざらん。氏逝去の日まで、氏に親炙し其病床に侍りし小川鮫君が『聖書之道』に寄せる一文、よく氏が日常を示すに似たり。今試に其數節を左に掲げんか。

明治三十一年十二月二十八日、寒雨颯々朔風骨を砭すの夜、我チヤーレス、イー、ガルスト先生逝矣、渠の何人なるかは、敢爲なる渠の生涯之を說明して餘りあるべし、されど吾人をして吾人の見たる渠の一斑を描かしめよ、吾人が始めて渠を見しは一昨年十二月の初旬、爾來一年間、吾人の眼底に映じたる渠は實に信仰の人にてありき、主義の人にてありき、眞摯の人にてありき、渠は傳道師の身を以て經濟問題に熱中し、其單稅主義は渠の一身を犧牲に供して辭せざる所、渠は之を以て神の御國を建る必要條件なりと確信し其信仰は實に堅確巖の如きものにてありき。曾て之が爲にミツション傳道何社の感情を害せるを聞くや、一書を送て曰く余が單稅主義を唱ふるの口を緘せんと欲せば先づ傳道師の職を免ぜざるべからずと、狂熱斯の如くなるを以て頗る一派の人々の疑を招きしも渠は毫も意に介するとなく、益々自說の擴張に努め、筆に口に盛に之を唱へ、亦勞力と費用とを惜まず、曾て一日三論文を草し、一を合衆國一を英國一を濠州の新聞紙に投じたるが如き、我國の新聞雜誌は、世界之日本、實業世界、社會雜誌、大日本、

朝日新聞、勞働世界、萬朝報、國の光、いばらき新聞等を始め苟も機を得ば英語或は日本語を以て之が寄書を怠らず、且つ自ら資を投じて種々の著作を爲しゝが如き、或は不充分なる日本語を以て各種の公會に演說せるが如き、殊に自ら單稅太郎と號し日本人の交際には都て此稱を用ひ、また單稅の要領を記したる印紙樣の紙片を製して書信に使用したるが如き如何に其主義に忠實なりしやを見るべし、而して渠は更に其著述せる斷片零冊を集めて火と生命を加へ、完全なる一篇の單稅論を著し大に世に示す所あらんとせり、これ渠が畢世の希望にして、造次にも顛沛にも忘るゝ能はざる處、願くは之を畢へて瞑せんとは渠の世を去るの日まで常に口にする所にてありき、渠曾て生理的奇習あり、寢後四更の頃に至れば、夢一たび醒めて頭腦頗る冴ゆ、渠は此時に於て世の憂を一身に集め、如何にして、我主義を行はんかと考へて曉に徹すると數々ありきと、これ渠が健康を失したる一因たらずんはあらず、嗚呼熱心遂に渠を蝕へるか。

以て、その一生を知るべし。傳道のことありて、旅行するや、自ら背に荷物を負ひ、草鞋を穿ち、決して洋食を取らず、うどん、そばの如きは、好んで其食せるところなり。『神戸ヘラルド』の記者、氏の性質を評して曰く「氏の質たる頗る素朴にして稍その考ふる所明晰を缺くと雖も、氏や實に熱實至誠の結塊なりしなり。亦氏の性や恒に爽快にして常に嬉々たり、しかも能く笑ひ以てその飾なき言論と天賦の諧謔とに一層の妙味を增さしめたり、氏や單稅を信ずると頗る厚く猶ほかの數學者が二に三を加へて五たるを信ずるが如く、この理想のためには全心を盡くして終始運動し、ために健康を害ふものあるを聞くも毫も驚く所なかりき」と。蓋し當を得たりといふべきか。其客を待つや頗る懇ろにして、食卓を共にするもの、一日四人を越え、一ヶ月大凡そ百五十をもつて算するほどなりしと。また吝みなく施し財庫概ね餘すところなく、常に曰く『日本國の經濟は大に亂れたり、されど、我家の財政は更に大に亂れたり』と。氏の說く所によれば、我邦土地の八分は、未だ耕さゝる地にして、全く空地の觀あるも、若し、單稅制度にして行はれんか、之を使用すると否なとに論

なく、借主は其地代を政府に納めざるべからざるを以て、勢ひ之を使用せざるべからざるに至り、日本の富は五年を出でずして二倍に達すべしといふにあり而して地代のみを以て税源たらしむべきの理、素よりこれあり。かの生産交換及び交通機關に課税することの産業の發達を害するはいふまでもなし。又財産所得は皆な勞働の結果なれば、之に課税するは猶ほ勤勉に罰金を科するに等く、天道の本旨に逆り、消費は生産交換の源因なれば之に課税するも、又産業の發達を障害し若し害毒品に課税せば、其國家は害毒品の賣買によりて生活するものにして、不倫の極なりといふべく、殊に隱匿し得る物品に課税する如きは、國家自ら國民に詐僞を奬勵するものといはざるべからず。故に以爲らく、當に國家社會の所得たるべき地代のみを以て、税源となすべしと。加ふるに現社會の一大弊害は、勞働者の受る分配、頗る過小なるにあり。然るにもし地主を廢して、土地を國家の所有となさば、國家は其地代を最低額に減ずべきを以て、生産のうちより、是まで地主の壓斷せる部分は、賃銀となりて勞働者の間に分配せられ、賃銀は騰貴し、諸税は除かれ、勞働者の幸福、昔日に數十倍すべし。ガルスト氏が『單税』に熱狂せる所因、實に茲にあり。勞働者をして、充分の衣食を得しめたる後に非ずんば、傳教のこと又殆んど無益なるを知りたればなり。

後の日、もし『單税』制度にして、我邦に行はれたらんには、之を始めて斯土に宣べたるもの、是れ米國クリスチャン教會宣教師チャールス、イー、ガルスト氏なり。即ち本號の卷首に其肖像を挿み、長く記臆の便りとす。氏、一千八百五十三年八月廿一日北米合衆國オハイオ州デートンに生れ、千八百八十八年十二月廿八日、日本東京築地に於て永眠し、青山フルベッキ氏の墓側に葬る。妻はローラ、デレチー女史、二男一女を携て、本年一月十七日其本國に歸る。氏や十六歲にしてオハイオ農學校を卒り、廿三歲の時ウエスト、ポイント陸軍大學校を卒業し、騎兵リユーテナントの職にあること八年、頗る聲望あり。明治十六年宣教のため始めて日本に來り、居ること十六年、その逝くや、享年四十六。其未定稿なる『富國新論單税經濟』の一書は、川井運吉小川皓二君の手を經て、今より三四ヶ月の後、未亡人の名に於て公刊せらるべし。悲哉。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○春の夕ぐれ

月影に梅の姿を踏み、春のよひ風にゆかしき香りをきく。世は悲しきまでに麗わしき季節とはなりぬ。若し幼なき兒の如く無邪氣にて、平らけき人の樣に心穩やかならんには、斯る春景色の如何に樂しく、如何に長閑ならんかと思ひ遣らるるものを、故さらに何すとて自から斯くは騷々しきぞや。年々の花は咲けども、今年こそ花見しと言わんほどの滿足なければ、眞とにや是非今歳こそはと、今より豫かじめ心構へせんとすれば、其心あやにくに千々にもつれて、此の事未だ片付かず、彼事いまだ安んじがたし、切めて其の事だけ首尾よくして、扨て後にこそ花見んなど思ふにぞ、心彌よ煩らふ。春宵とゞめがたく、月夜陰り易し。明日といわず、今夜一夜のながめに厭き、念頭、すべての機事を沒してこそ、刹那々々の極樂はあるものを。なまじひに事を好みて、心、無益に悶ゆるとの笑止さよと、覺る下より村雲の亦たうき起つこそ淺ましけれ。實に、天國は異邦にあらず、安樂は外より求むるものかは。此を、彼をと、次々に慾望して、夫を得て後にこそと思はん人は、一生遂に羈絆を脱す可らず。失ない易き人生に住して、消え易き春の景色を觀じ乍ら、其の目前の風雅を在の儘に樂しまざるこそ愚かなれ。いでや、我、何事も思はで、春の花の姿を慕はん。其の影のうつり易く、其香ひの散り易く、其趣きの變り易くとも、たゞ見つゝあり賞めつゝある間の暫しなりとも、心かぎり樂しまなん。いでや、我、無益に悲しまじ、詮なき物思ひをせじ、分に過ぎて所望せじ、暫しなりとも、天地の春に出で會ひて、其の盛りの裝ほひを見るよを樂しまんとはすれど、さて〳〵多恨長恨は禁めがたきもの哉。嗚呼、われは寧ろ其の恨を懷きながらの花見せん哉。

○ラザロよ出よ

素直にして優艶に、信じ易くして惡しきを意はず、扨て〳〵天稟の美くしき人かなと思ふにつけ、我が心のねぢけがちな

るを恥ぢ、心平らかに氣の穩やかなると、若し彼の人の如くならましかば、我心いかに輕ろかるべきなど思ひ煩らふ輩もあるべし。斯る有爲有心の勞苦をもては、いつ迄も其心を淸めんと難し。須からく先づ其の煩悶を斷絕し、直ちに其の羨やみの心を消すべし。渠は渠の如くに生い立ち、我は我の如くに生ひ立つ、これ各々の天稟なりと思ひ定めて、只故さらに取つくろはんとせざるこそ、先づは無邪氣の初めなるべけれ。ラザロ、死して葬られ、三日を過たり、人々曰く肉まさに腐れ、臭氣あらんと。耶蘇大喝して曰く、ラザロよ出でよと。ラザロは其まゝにて出でたり。釋尊亦た此の消息に說法して曰く　即身成佛と。即ち現身、現在のまゝに靈化する所以の福音を知らば、衆生一切の成佛する秘義を悟らん歟。抑も人は大いに修めざる可らず、而も餘りに凝る可らず。迷なきにあらず、迷へるまゝに悟れ。邪氣なきはなし、邪氣あるまゝに無邪氣たれ。これ人間の平安なれ。

○勞役の風流

余にもし畵人の技倆ありて思ふまゝに丹靑をつくすべくんば人の無心に勤勉して、無慾に勞働しつゝある爲躰を寫さまほし。凡そ世にありて此上なく心地よく、此上なく健全なる光景は、まさに此の種の狀態なるべしと夙に思へり。役々として終日勞働し、暮色熟すると同もに行吟じて家に還る。夙朝、天星燦として、曉氣爽絕の時、快々然として、戶外に活動するなど、何等の健全、何等の風雅ぞ。扨て忌わしきは、人の懶漫として、半ば醉へる如く、半ば腐れたる如き、怠惰の狀態なり。見るだに心地あしゝ、之に觸れては汚がさるゝ思ひす。抑そも、勞働は、金錢の爲にあらず、勤勉豈に活計の爲ならんや。たゞ其の愉快にして風流なればなん。斯くせざる時。如何にも面白からずして、自から顧りみて甚はだ不風流なるを忌む。余等は只、一生役々としてあらまほし。

○名士の初對面

騒がしき名の名士に初めて會ひて、風評に聞きたる英雄は此人なりやと思ふにつけ、驚ろかるゝともあり、可笑しきともあり、其都度樣々なり。其時、名士の風采を窺ふに、氣滿ち意張り、まさに我に向つて眞劍の仕合を爲さんずる氣色なり

眼光爛々たり、態度間隙なし、ふと其躰裁を見て、感心の事やと思ふにつけ、翻がへつて亦た笑ふともあるもの也。女は百年の身を托する吾郎の外に裝はふとも要るまじきに、總べて麗はしく見せたきか。英雄も亦た何の道樂ありて若か大衆に向つて裝はんとするや。さしむき吾號の如きものには其用もなかるべきがと思ひ出でゝは、只だほゝえまれてのみ、語氣自からゆるみ、たはいなきとのみ相手にかたる。此に於て彼は輕んずるにやあらん、安心するにやあらん、其肩次第にゆるみ、其目次第に解け、其息氣やうやく平らか也。

○國家の爲め

國家の爲めと云ふは近來の流行なれど、凡そ國家の爲めにすと言ひて爲す事は兎角不自然にて、機の生命に徹しがたきものゆへ、大方は國家の害となるもの也。左れば、事實の結果に就て言はんに、古來眞とに國家の爲に益となりたるものは、國家あるとを忘れたる人々の自然に爲せし事業なり。初めより國家てふ空名の爲に爲し事業は、十中八九、すべて無益なり。蓋し國家は大、小き者のもつ得意らしき奉公を要求せず。

新雜誌

◉臺灣協會報（第五號） 益田孝氏が「臺灣の視察」に曰く、臺灣の經綸は、一に、彼等土人をして生業に安んぜしめよ、成べく其習慣を破るとなく、自治を妨げず、彼等他を妨げざる限り之に干渉する勿れ。一に益々兒童の教育を努め、內地移住を奬勵し、暗默の裡に彼等をして我に漸化せしめよ。又曰く、西洋人が到底濟度す可らずと斷念したる支那人を文明に導くの榮譽は日本人の頭に得ん。彼は尤も有望なり。幣制は臺灣銀行に銀貨發行の權を與ふるを危險とす云云。○其他、臺灣大租權の性質（松本龜太郎）。臺灣產業の現在及將來（井上甚太郎）。舊嘉義縣下殖民地等なり。

◉海國少年（第三年第二號） 「孤島の南洲翁」を掲載す。もと小册子となるべかりしもの、讀者沿讀す。

◉史學界（第一號） 日本人太平洋の初航の顛末（村川堅固）。後北條彊域考（辻善之助）。地方制度の起源（篠原市之助）。等あり。史學研究に有益なる雜誌なるか。本號は多趣味多種類を示さんとせし故にや、各篇あまりに短かく且つ急げり。

◉國學院雜誌（第五卷五號） 新葉和歌集を讀む（島野奇次）。五七調の七五調に變じたる理由（高橋龍雄）。舊幕府勝手向（內藤恥叟）等あり。

◉十善寶窟（第百八號） 佛敎々育之必要勅語訓解（雲照律師）。顏內無我（隆應律師）。

◉大日本婦人教育會雜誌（第百十三號） 下田歌子女子教育の演說筆記あり。下女の事を歎ず。

◉殖政叢々報（第一卷第七號） 韓に對するの道如何（野澤銘一）に曰く、其道唯一、即ち外交の事端によらず、戰爭の効果に待たず、我國人の渡航する者を禁壓制限せざるは勿論、單大に之を奬勵して、朝鮮移住の我國人を增加せしむるにありと。

◉日本弘道會叢記（第八十三號） 池田草庵の行狀（土屋弘）秋田の慈恩碑（伏見叙之助）あり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◉哲學雜誌（第百四十五號）　獨逸哲學と佛教との比較（近角常觀）。文中子の傳（有馬祐政）あり。

◉社會（第二號）　支那社會の特質（五來欣造）に曰く、支那をして亡國たらざらしむるものは唯夫れ滿州政府頑習の一事あるのみと。

◉田舍（第八號）　但州人材論あり。

◉太陽（第五、第六號）　高島嘉右衛門氏の實歷談まことに爽快なり。

◉うらにしき（第七十七號）　正教音樂（高橋五子）は、維新后我國に於る正教音樂の發達を叙し、之に功績ありしサルドフ。チハイ。クルイジヤノフスキー。リチフスキーの四氏を畧叙せり。

◉舊幕府（第三卷第二號）　海舟先生隨筆の語寫眞を載す、語に曰く、世路風霜吾人鍊心之境也、世情冷煖吾人忍耐之地也、世事顚倒吾人修行之資也。

新刊書

◉千山萬水　大橋乙羽著　博文館版

大橋乙羽氏、性遊歷を好み、東西に行脚し、風景、吾意に適すれば、之を寫眞に映じ、心懷の興趣浮び來りては、之を文に錄す。廿五年以來觀光遊歷の記文、及び其寫眞を收めたるもの、之を名けて『千山萬水』と云ふ。寫眞版景畫の美、記行文字の佳、共に見るべく、之を讀み、之を觀て、背中また風景を探くるとを樂しむべし。製本の美また之に適ふ。

◉俳諧論集　巖谷小波校訂　博文館版

論集收むる處、玉くしげ、俳論、南北新話、俳諧耳底記、三册子、俳諧一串抄、蕉門俳諧語錄、俳諧埀語、柿晋問答、山中問答、湖東問答、俳諧或門の十二種、俳論と稱すれども、多くは俳人の隨事雜記、また之を見ば、以て今古俳諧道の歷史を知るを得べし。

◉岩崎彌太郎　弘松宣枝著　民友社版

勝先生曾て曰く、土佐の人物は、板本龍馬と岩崎彌太郎二人なりと、弘松氏は土佐の人、曩には同鄕の俊傑龍馬を傳し、また茲に之に對敵するの傑士岩崎彌太郎を傳す。傳ば素より小册子、よく海上王の一生を傳ふるに足らざるを信ずされど、之によりて以て、彼の人となりを窺ふに足るべく、其記する處、海運史は以日本航海術の發達と、岩崎家致富の由因を知るべし。吾人は未だ曾て人の多く傳へざるこの豪傑を記して、世に紹介したる著者の勞を多とするものなり。

◉新小說　第四年第四卷　春陽堂版

此卷錄する處、小說は小杉天外の『肱まくら』、雜錄には、露伴の『相合炬燵』等あり。人文に宙外の『高山林太郎に質す』とて。詩歌と人體美に關する議論あり。

片々

●高等女學校　女子教育の必要は今𦾔を要せす、我當局者一時に六中學設立の突飛的計畫を爲すありて、而て千葉縣一の高等女學校を觀ざるは如何。高等女學校の設立財政之を許るさすと云はゞ須らく無用の一二中學を廢して、而て更に必要なる女子教育の途を開く可し、當局者以て如何と爲す。（新總房）

●十六年前と今との流行比較　十六年頃切りに藝妓などが着た、婦人の雨合羽が全然すたれて、吾妻コートとなつたと、小學校の生徒の袖が取れて筒袖となつたのと、縮緬の襟卷それから上ばかりのマントがすたれて、二重まはしとなつたのと古代更紗の流行たつた縮緬中形が、今は織物模樣になつたのと、其の頃太織の無地の羽織を着た商人が、今は絹縮の無地になつたのと、伊勢崎銘仙を着たおかみさんの着物が、秩父銘仙になつたと位なものでしやう。（中央新聞大彥主人）

●女學雜誌　第四百八十二號

女學雜誌中氣品を備へ、一貫の主義を保ちて、優に万綠草中紅一點たるは、此の雜誌を措いて他に求む可からす、其の嘗て全盛の時、北村透谷島崎藤村戶川殘花の明將の面々が筆を縱橫無盡に揮はれしも、透谷世を厭ふて天に歸せしより、當年の意氣絕えしが如しと雖も、尙ほ尊き節は殘りて美妙の光を放てり。昔しを花盛りとせは今は綠り深きとも云はんか。本號社說には海舟翁の日常面白く、女學欄の花園隨筆は平易明晳議論超乎たるものあり。青柳君の音樂談は甚丁寧にして、當今音樂界の驍將上眞行氏を紙上に躍然たらしめ、櫻井鷗村子の近松女氣質は讀去り甚だ次號の待たるゝ心地ぞする。評論の村翁時勢談は通俗政治學とも云はんか、誰にても議會の事など解せらるへく、其の隨感欄の何となく何處かに佛教の香ひあるは想ふに岩本氏の筆なるへく、例によりて奇拔簡潔。雜錄の二つ微笑時事なと見捨てべきものなく若し之に昔の姿を少しく寫さばやと望まる。

（紀伊每日新聞三月九日）

●近時の流行　挿花、謠曲、メッキリ頭を上けたり。相撲、演劇は例の如く、娘義夫太は大分下火？。賄路、畜妾、それより以下の流行はいはぬが花なり。

●舞蹈と女學生　近頃舞蹈を習ふ女學校二三、女子高等師範學校、富士見小學校もこれ。然るに地方にては、雲州松江女子師範學校の生徒も之に熱中せるよし。

◉阿彌陀會　とて人民新聞の記るす所に島根縣某地方に婦人會の發會式を擧ぐ當日發起人の演說に曰く「世辭で固めて浮氣で捏るは已に陳腐に屬せり女傑たるもの須らく彼れ男子を大道臼の尻下に敷きグウの音も出さしめざるを要す是れ豈に快絕愉絕ならすや男子時に花柳に遊ぶ女子獨り美少年と相狎るの自由なからん」一同拍手喝采と。これ畢竟地方新聞の惡口を切拔きたるものなるべし。

●茶焙の唄　横濱の茶焙唄ふて曰く
お茶場やつこらさで溜めたる金をみンなお前にちや〱むちやく
鐘は鳴る鷄は啼くもう夜が明ける早く行かなきや釜がない
七ツ起きして辨當箱さげてお茶場通ひも意氣なもの

時報

●學事

●中學校及女學校設置廢止規則　三月十日文部省令第十四號に曰く明治三十二年勅令第二十八號中學校令第七條及同年勅令第三十一號高等女學校令第七條に基き中學及高等女學校設置廢止規則を定むること左の如し

中學校高等女學校設置廢止規則

第一條　中學校又は高等女學校を設置せんとするときは公立學校に在りては其管理者に於て私立學校に在りては其設立者に於て左の事項を具し文部大臣に稟申すべし

一　名稱▲二　位置（私立學校に限る）▲三　學則▲四　生徒定員▲五　收入支出豫算表▲六　職員數及俸給額の豫定▲七　設立者の履歷（私立學校に限る）▲八　法人又は組合の設立に係るものは其寄付行爲、定款又は組合契約及其沿革但寄附行爲又は定款にして文部大臣の認可を受けたるものは添付を要せず

公立學校に關しては地方長官は同時に位置を選定し文部大臣の認可を受くべし

第一項第一號乃至第四號及公立學校位置の變更は文部大臣の認可を受け第八號の變更は其都度文部大臣に開申すべし

第二條　學則には少くとも左の事項を規定すべし

一　學年、學期、休日に關する事項▲二　學科課程、授業時間に關する事項▲三　試驗に關する事項▲四　生徒の入退學に關する事項▲五　授業料、入學料等に關する事項▲六　賞罰に關する事項▲七　寄宿舍に關する事項▲八　職員の職務に關する事項

第三條　中學校又は高等女學校の校舍を設けんとするときは校舍、寄宿舍及校地の圖面を具し文部大臣認可を受くべし

前項校地の圖面は其所有者、面積、地質、體操場區域及面積竝に附近の情況を記載し且飮用水の定性析表を付添すべし

校地、校舍又は寄宿舍を變更せんとするときは其部分に係る圖面を具し文部大臣の認可を受くべし

第四條　學校長を任免したるときは公立學校に在りては地方長官に於て私立學校に在りては設立者に於て其都度文部大臣に開申すべし但任用の場合には履歷書を添付すべし

第五條　中學校又は高等女學校を廢止せんとするときは其事由竝に生徒の處分方法を具し文部大臣に稟申すべし

第六條　道廳府縣立にあらざる中學校竝に高等女學校に關し文部大臣に提出すべき文書は地方長官を經由すべし但其設置廢止及稟申に關しては地方長官は其意見を具すべし

第七條　中學校分校の設置廢止等に關しては此規則を適用す

附　則

第八條　此規則は明治三十二年四月一日より施行す

●大津高等女學校の新設　大津市會にては三月十六日に、高等女學校設立の件を議せしに、大多數を以て可決したる由

●東京府立女學校の擴張　東京府の女學校は神田橋外に設けたるもの一校にして是れも府立の名あれども、只だ知事の監督するのみにて、其經濟等は一文も府より補助せざりしが、今回新女學校令の發布あり、府縣には是非共一の女學校を設備せざるべからざることゝなりしかば、東京府にては取敢へず、神田橋外の女學校を擴張し、之れに充つる筈にて年々地方税より九百圓づゝ補助することゝなり、近日府會に於て決議する筈なりと。

●官立高等女學校規則改正　御茶の水の同女學校にては、四月一日より規則を改正し、從前は尋常小學校卒業生を一年級に入れて六年卒業なりしが、今度は高等小學校二年の卒業生を一年級に入ることゝなすべしと云ふ。右改正の結果として、學級編制替あるに付、新規則の三年級には多少入學を許す由。

●女子職業學校生徒募集　神田一ッ橋なる共立女子職業學校の裁縫教員養成科及割烹科の兩科は、昨年創めて設けしものなるが、爾後大に好成績を得、本年は既に數十名の卒業生を出すに至りしを以て、昨今生徒募集中にして教員養成科への入學志願者は來る十八日より入學試驗を行ひ、其上本入學を許すと云ふ。又割烹科は前年一組（廿五名）募集せしに、案外多數の申込ありし爲め三組を設け、本年は五十名募集する由にて入學志願者は本月中に申込むべしとなり。

●靜岡女子技藝學校　過般類燒の厄の罹りたる靜岡市大工町の技藝學校は、昨年來再度の火炎に遭ひたる次第にて其不幸實に云ふ計りなきことなるが、今回假教場を屋形町に開きたるに就ては、凡ての備品等にも多額の費用を要することゝて同校長其他關係者に於ても大に困難を感じ居りしが、深浦遠藤猶醫士の夫人之か

開き、道德の事に思ひ過般來駒夫人に於て義捐金の募集に從事し居れりさ云ふ。

●山口縣の女教員夏期講習合開設計畫　山口縣師範學校女子同窓會にては、縣下の女教員を集めて、來る八月三日より以後十日間、山口縣師範學校に於て、夏期講習會を開くの計畫をなせり。學科は教育、裁縫、家政、唱歌及遊戯等なり。

●東京府高等女學校生徒募集　今年度は本科二年級百十二名同三年級四名を募集し、志願書は三月三十日限出願すべく、入學者資格は高等小學第三年修業證書を有する滿十三才以上の者に限る。此資格なき者は試驗を要す。入學試驗科目は、二年は讀書作文算術歷史地理々科、三年は尙國語家事裁縫を加ふ。在學年限は本科一年講習科一年、授業科一ヶ月本科一圓五十錢、補習科貳圓、授驗料一圓。卒業徒は小學女教員なり、また府縣知事の推薦によりて、女子高等師範學校に無試驗入學するを得。

●東京女學館生徒募集　各科へ入學を許し、生徒期限は三月三十日限、入學者資格に規定なく、公立小學校の卒業者は無試驗、其他夫さ同等以上さ認むる履歷を有するものは無試驗。在學年限は本科五年、專門科二年、特別科無制限、費用は一ヶ年本科二十二圓、專門科二十七圓五十錢、特別科三十三圓、寄宿料其他一ヶ月十四五圓なりさいふ。

●東京女學館の校舍　虎の門なる東京女學館は、曾て宮內省より其校舍及敷地の永代拜借を得て、今日に至りたる次第なるが、今回同省に於ては構內に御料局を置き、猶引續いて各種の事務所を設置するの要を感じたりさて、便宜女學館の移轉を請求し來りたれは、同館に於ても適當なる敷地定まり次第急に校舍を新築して。之に移轉すべき見込にて目下敷地の選定中なり。

●華族女學校入學試驗　四月中旬本校に於て入學試驗を施行し、及第者は本年九月より授業す。志願の向は本月三十一日までに願書差出すべしさ。

◉會合

●八王子婦人智德會は去十二日元横山本願寺出張所に開く、好天氣にて紳士夫人令孃等の出席する者多く、新加入者へ證書を與へ、青木政子の期誼演說あり。次で講師本多周山氏婦人の德性、修身齊家の二題にて有益の講話をなし、敎草なる雜誌を一同へ配布して散會せり。

●松江婦人會　同會三月五日松江商業會議所階上に開けり。例に依りて田野俊貞氏の酒害論片山尙綱氏の講話且つ有志の婦人には生花の催あるあり、同會は開會度每に入會者の數を增加し來しより會員中には、松江病院の醫學士及び其他の醫師を講師に囑托せんさの計畫ある由なり。

◉人事

●田島春子の壯心美學　此度ニューカレドニア島ある田島應親氏より同島にて得たる三個の頭蓋骨の內一個を理科人類學大學教室に、一個を醫科大學解剖室に、一個を、赤十字社病院の岩井禎三氏の許に寄送し來りしが、同島は濠洲の東に位し、佛領ローヤルチー島の一島にて佛領さなる以前は、食人の蠻風盛なりしも、今は全島の土人カトリック教に歸依し、斯かる惡風も其の痕を絕ちたりさいふ。田島氏は妻春子さ共に二十七年一月より二十八年の四月迄同島の首府ヌウメアに近きチョウ村にありて、鑛山事業に從事せる際、偶々山間に頭蓋骨などの遺棄しあるを聞き春子は若し此頭蓋骨にして土人のものならば、以て學者の研究に資すべく、萬一にも日本人のものならんには厚く之を葬る方然るべければ、何れにしても之を拾得せんものさの發意にて、數日を費してチョー河の兩岸を限なく搜索せしも、遂に得る所なく、最後にチョー河の河口なる一角の斷崖の空洞なる巖間に十數個の頭蓋骨累々さして存するを發見したり。此の內多くは缺損し居りて僅かに三個の完全(一つは下顎骨を缺く)なるものを得て今回夫々之を寄送し來りたる始末なりさ云ふ。(國民新聞)

●美談一束　貞婦の名譽　福島縣安達郡太田村熊谷伊右衞門未亡人國井ハツ(福島新聞三月五日)○貞婦美談　佐賀縣藤津郡濱町酒井ユイ(廿八)(佐賀自由三月四日)○東奥の貞婦　宮城縣伊具郡小齋村津田今朝松妻さら(三十五)(太平新聞三月十日)

●女學家庭文壇雜俎(本誌〆切迄)

◉夫人の素顏○跡見花蹊○税所篤子　報知新聞連載
◉家庭の爲(種々)　海面新聞連載
◉女性さ服粧(梅子生)　山形自由新報
◉家庭の栞(種々)　大坂毎日新聞連載
◉策士の妻　万朝報三月十一、二日
◉大工の娘大臣大將の夫人さなる　同　十八日
◉文學的家庭さ美育(天、冥)　大阪毎日新聞三月七日
◉女子高等師範學校附屬幼稚園保育の狀况　教育實驗界第三號第五號

花見にといでたつさまのさま〳〵に
都大路を人のねり行く

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

救濟新報

第二十九號目次

◎救濟新報）當今の二弊 理想◎論說○名利以上 富田政◎講演○信仰之經歷 松村介石
◎教育○兒童研究（其三） 麻生正藏◎雜錄○富者の義務 同情生◎史傳○新島襄先生（下）
高橋鷹藏◎文苑○春旅○雪中柿 下田歌子○太田道灌 高橋清子○秋夜述懷 ゆかり◎家
庭○庭の八千草 松山俊◎訪問○片山潜君を訪ふ 悠々生◎血と涙○同情者の來翰◎雜報
○丹羽清次郎氏の消息ゝ一大貧民學校設立の計畫○小林富次郎氏の慈善○醫科四年生の善
行○長崎盲啞院の入學勸誘○細民救濟の社團結社○慈善學校◎院報○賛助員募集に就き○
立川雲平氏○事務院說 田靜○團扇部○汎く基本金を募集す○美行◎院兒の履歷◎批評◎通
信◎院日誌◎報告

發行所 東京神田區仲猿樂町十七番地 救濟新報社
大賣捌所 濃飛育兒院東京支店 商業部

日本學術講習會 會員募集廣告

本會は學者を招聘して教育に從事する者に必要なる諸種の學術を講習するを以て目的とす但其講習程度は大略高等師範學校の學科程度に等くすべし

教育學	講師 文學士	下田次郎君
倫理學	講師 文學士	蟹江義丸君
國語學	講師 文學士	保科孝一君

東京帝國大學教授 文科大學長 **文學博士井上哲次郎先生**は本會の**顧問**として時々倫理學上及教育學上の講演を承諾せられたり

東京帝國大學教授文部省參與官兼專門學務局長 **文學士上田萬年先生**は本會の**顧問**として國語學上の講演を承諾せられたり

本會々員を甲乙二種に分つ甲種會員は親しく講義を聽聞するもの乙種會員は講義錄に依りて志望學科を講習する者

乙種會員講義錄料

◎倫理學 講義錄	三册發行	金六拾錢
◎教育學 講義錄	三册發行	金六拾錢
◎國語學 講義錄	三册發行	金六拾錢

但し二學科の講義錄を望む者は講義錄料金壹圓拾錢三學科の講義錄を望む者は講義錄料金壹圓五拾錢とす

◎講義錄 本年の文部省に於ける該學科教員試撿問題及解釋を附錄とす

◎講義錄發行 乙會員に頒つべき每學科の講義錄は三月下旬に第一號を出し爾後每月一回づゝ出す

◎申込期限 乙種會員は此際成るべく速に申込まれたし

◎講義錄料 講義錄料は入會申込の節送附あるべし為替は「神田一ッ橋通取扱所」とせられたし

◎規則書 詳細なる規則書を望まるゝ方は郵券二錢を添へて御申込あるべし

◎豫告 本年夏季には視學及學務に從事せる諸君の為に必要なる教育行政及憲法大意等の講習を開くべし

東京神田區三崎町三丁目一番地 日本學術講習會

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

日本一の
大新聞紙

時事新報

年中無休刊

福澤先生の最近著述

女大學評論 新女大學

右四月一日より時事新報に掲載す先生が得意の快筆を揮ふて從來我國女道の經典として認められたる貝原翁女大學の非理不法なるを論破し別に今日の社會に處すべき新日本の女道を説示したるものにして男女を問はず一讀を要す

新報定價　（前金）一部貳錢五厘、一ヶ月五拾錢、三ヶ月壹圓四拾五錢、六ヶ月貳圓八拾五錢、郵送の分郵税一ヶ月十五錢

發行所　東京京橋區南鍋町二丁目十二番地　電話（編輯用 新橋一四九番 事務用及長距離用 新橋三二七番）　**時事新報社**

出張所　大阪北區堂島濱通一丁目四十番屋敷　電話（東四九二番兼長距離用）　**同出張所**

◉全國各地に賣捌店あり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

主筆内村鑑三

東京獨立雜誌

毎月三回五の日發兌

雜誌界寂寞を極むる今日に當り、政治に、文學に、道德に、教育に、宗教に、獨特の竟見を抱持し、高潔なる思想を我國に注入せんと努めつゝあるは獨り本誌あるのみ、今や號を重ぬる貳拾有六、廣く全國に行き渉り最も誠實なる讀者を有す、更に志士の購讀を待つ。

一部五錢　郵税五厘〇十部以上前金郵税共五錢宛の割〇五ヶ部前金郵税共貳圓貳拾五錢〇見本郵券六錢

申込所　東京神田區南甲賀町八番地　東京獨立雜誌販賣所

◎總裁　大勲位閑院宮載仁親王殿下　創立明治廿五年十一月
◎副總裁　正三位勲五等伯爵勸修寺顯允君

大日本中學會々員募集

現在會員一萬七千有餘名●講義錄見本金十二錢●詳細なる會則は切手二錢を送附すれば直に進呈す

◎主義　我國體に應じたる國家主義に基き國民に智德を啓發し忠良着實の人士を養成せんことを期す　◎學科　中學令に準じ猶諸外國の教育制度を斟酌し且簿記農學本邦法制一班實用經濟等の諸學科を講ず　◎方法　中學校五箇年の課程を滿三箇年に分ち三學級に編制し各學級共毎月三回講義錄（一行三十五字詰一頁十四行毎回百頁）を發行し學資の不足學年の長きが爲め又は業務の爲め遠く遊學すること能はずして空く恨を吞み廢學するに到る不幸の青年諸氏をして坐ながら高等普通學科を研究せしめ兼ねて各公私學校の入學試驗文官教員檢定試驗等の豫備講習をなさしめんこと期す

◎學資　入會金三十錢　會費毎月金六十錢前納

◎注意　學期は各學級共毎年一月に始り十二月に終るものにして一月十七日を以て第八期の各學級講義錄を新刊し目下第七號に達す此際洽く各學級共入會を許容す又特に入會者の便宜に從ひ卅一年度全部の會費を追納する者に限り一時に同年度講義錄全部を取纏め之を送付し其講習の狀況に應じ直に進みて本年度第二若しくは第三學級の新學期に連絡進級するの便宜を與ふべし●陸海軍人諸學校教員には特別優待法あり本會會友（全學科修了者）の紹介により入會する者は束修金を全免す

東京市小石川表町百九番地　大日本中學會　電話本局九百二番

巖本善治編

海舟餘波

一册三十錢　郵税四錢　郵券代用三十七錢

海舟先生在世の日、編者毎週其門に趨りて清話を聽き、歸つて直ちに筆記し、一々其眞面目を書留めたる者、今殆んど一堆を成せり。蓋し世上大率ね幕臣の勝、安房守を傳えて、偏に其舊功を賛す、素より是れ可ならざるに非ずと雖も、先生苦心の存する所、寧ろ其幕府明渡しにあらずして、反て明治新政府の維持建設にあり。但夫れ先生能く形跡を沒し、功名を讓り、巧に韜晦して擾々の評を避くるの故に、當代多く之を知らざる耳。今や先生一去して亦之を秘するの要なし、此書、一主として此般の消息を傳ふ。坊間既に一二の著書あり、其梗概を言へる者の如きは、此書皆省き、凡そ先生の事業言論にして未曾て世に出でず未曾て世の思到せざる者を輯收す。悉皆編者親しく聞く所にして、毫も他子の文を加へざる也。又別に先生の寫眞を添ゆ、是れ最近の撮影に係り、コロタイプにて製作す、銅版鉛版をもて比す可らず、眞采歷々、光姿燗として面あたり接するが如し。又先生終辭の文稿一篇を寫眞版に附し併く添ゆ。是昔し山岡鐵舟長逝すゝの日、先生自ら偈を作て弔する者、其辭悲痛、達人知己を惜むの情、流露迸溢す。今ま斧削の痕點々親るべく、眞に一代の珍なり。又東有爲に與ふるの書、及び金貨本位制に對する建白文の如き、眞に先生平常の苦心を濟たるものを見るべし、併て附錄とす。如今版成り正に發賣す。同好の士希くは一讀を賜へ。

東京巢鴨庚申塚　女學雜誌社
發賣元　東京市神田區表神保町　東京堂

（轉居　東京市牛込區市ヶ谷砂土原町一丁目一番地　櫻井彦一郎）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿九年七月十九日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY